出口瑞月口述

霊界物語

如意宝珠

亥之巻

始

特501
245

出口瑞月口述

如意寶珠

亥之卷

〔靈界物語第二十四卷〕

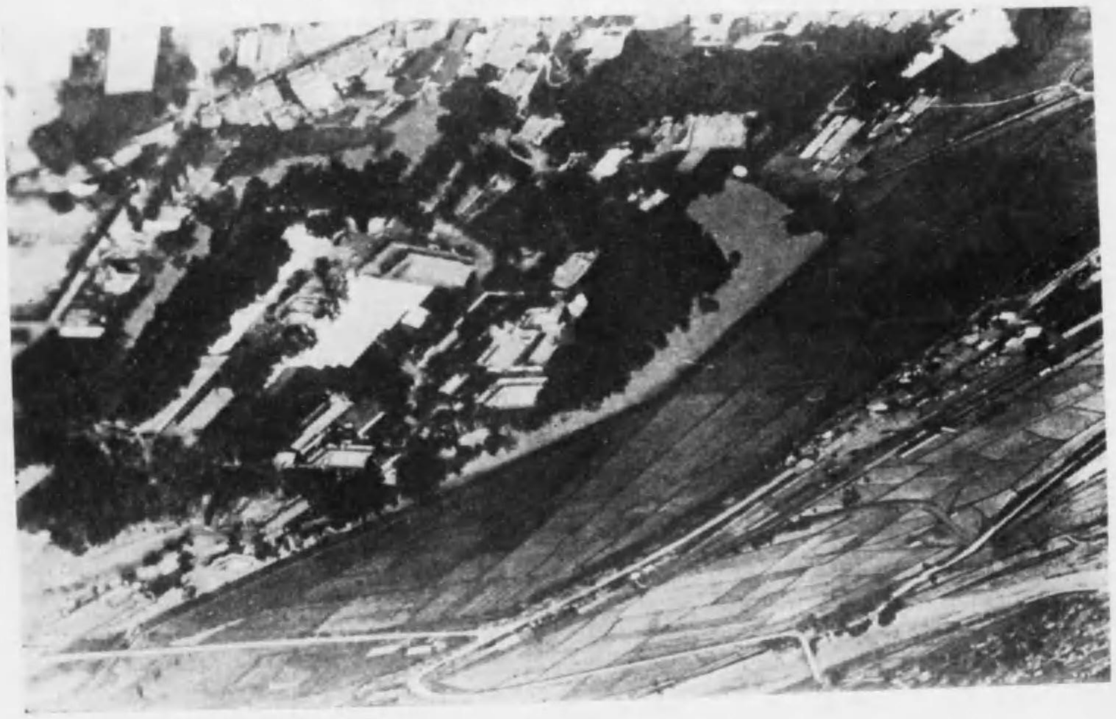
天聲社發行

1094665

口述者　出口瑞月聖師

出口瑞月口述
神意
天恵指針
第六巻
(聖師十三歳)
東京
國立國會
51.12.16
圖書館藏書
1094665

空より見た大本神苑と綾部町（昭和八年）



（上　同）　鳥瞰天本大町岡龍　上　全

序文

一、霊界物語もいよ〳〵二十四篇まで口述し終りました。此総日數一百二十八日間、一册に就き平均五日强を要した次第であります。

一、大正十一年六月は、種々の故障の出來せしために、一ケ月間口述を中止いたしましたので豫定とは非常に番狂はせを致しました。

一、いよ〳〵七月より又もや神助のもとに口述を初めんとする際、編輯長外山氏病氣の爲、休養さるゝ事となりましたので、筆記も思ふ樣に捗らぬのを遺憾に存じます。幸ひ手八丁口八丁の勇者松村眞澄氏を初め、加藤明子の熱心者、北村隆光、谷村眞友の四氏が執筆されて居ますから、稍安心を致して居ります。

一、今年の夏は少し旅行する考へですから、又々口述が遅延するかと案じて居ります。唯何事も惟神に任すより仕方はありませぬ。

大正十一年七月五日　於松雲閣　口述者識

如意寶珠【亥の巻】(24)

目次

序文……一
總説……一

第一篇　流轉の涙

第一章　粉骨碎身……五
第二章　啞　呿……三一
第三章　波濤の夢……五〇
第四章　一島の女王……六五

第二篇　南洋探島

第五章　蘇鐵の森……八三
第六章　アンボイナ島……一〇三
第七章　メラの瀧……一一九
第八章　島に訣別……一三七

第三篇　危機一髪

第九章　神助の船……一五九
第一〇章　土人の歡迎……一九一
第一一章　夢の王者……二一〇

第一二章　暴風一過……二二六

第四篇　蠻地宣傳

第一三章　治安內敎……二三九
第一四章　タールス敎……二七二
第一五章　諏訪湖……二九四
第一六章　慈愛の涙……三二二
靈の礎（一〇）……三三五
同（一一）……三四一
神諭……三四七

底ひなき神の惠の眞清水を
世にうるほすは愛善の道
常立に浦安國と治めゆく
神の心は愛の善なり

瑞月

如意寶珠

【亥の巻】〔24〕

口述者　出口瑞月

筆錄者　松村眞澄
加藤明子
北村隆光
谷村眞友

總說

現代は眞の宗教無く、又宗教家もない。キリスト教徒はキリストを知らず、佛教家は佛教を知らず、教育家は教育を知らず、紺屋の白袴、箕賣り笠でひる譬の通り、眞に宗教や教育や、將た又政事を解したものは尠い。從つて人間として談をしようと思ふ者も餘り澤山に有りさう

もない。歩行く樹木か石地藏か、もの言ふ案山子かと思つて居たら餘り大きな間違ひもない樣だと、私の副守らしいものが囁いて居るやうだ。神代に於ける神の道の宣傳使（今日の所謂宗教家）の舍身的活動と、無抵抗主義と忍耐の强き事を思ひ出せば、現代の宗教家には五大洲中唯の一人も無いと謂つても過言ではあるまいと思ふ。私は現代の教役者の日々の行動と、その心理狀態を見るにつけ、神代の教役者の活動に比し、實に天地霄壤の差あることを歎息せずには居られないのだ。

本卷末尾には、神代に於ける宣傳使の至善至美、至仁至愛の大精神が遺憾なく口述されてあるから、宣傳使は更なり、凡ての宗教の信者たるもの、本卷を一讀されて大神の大御心を覺り且つ信者たるもの丶軌範となし、眞の日本魂を發揮されん事を希望する。キリスト教と云ふも、佛教といふも、神道といふも、その眞髓を窮めて見れば、何れも日本魂の別名に外ならぬのである。況んや日本魂の本場たる神の國に生を托するものに於てをやである。

大正十一年七月五日　於松雲閣　瑞月口述者識

堪へしのび勤め勵みて勇ましく
　進むは人の荒魂かも
打たれても斷れずもつれず綾錦
　織りなす瑞の御魂大神

眼に見えぬ神の御國も現世も
愛善神の住家なりけり

遠近の區別もしらに救ひ行く
愛善の神いまや伊都能賣

瑞月

第一篇　流轉の涙

第一章　粉骨碎身（七三一）

遠き神代の其昔
イホの都に現はれし
鬼雲彦が片腕と
イホの館の沒落に
メソポタミヤの天恩城に
時めき渡るバラモンの
教は四方に輝きて
光を添ふる芽出度さよ

埃及國に名も高き
バラモン教の大棟梁
頼む鬼熊別夫婦
後晦まして瑞穂國
教の射場を立直し
勢旭の昇る如
天地自然の樂園に
鬼熊別と蜈蚣姫

二人の中に生れたる
一粒種の初愛娘
隙間の風もアテドなく
父と母との言の葉を
年に似合はぬ惡行も
又宣り直し目の中に
惡逆無道の兩親も
眼は晦み耳は聾へ
愛に溺れてお轉婆の
小糸の姫の身の果ては

十五の春の小糸姫
蝶よ花よと育くみて
寵愛過ぎて氣儘者
尻に聞かして小娘が
直日に見直し聞直し
飛び入るとても痛からず
我兒の愛にひかされて
鼻も無ければ口もなく
あらぬ限りを盡したる
初めて知つた初戀の

胸の焔に焦されて
團栗眼の鼻曲り
慕うた女の眼より
大きな口を打開き
男の中の男ぞと
親の許さぬ緣をば
濡れてほとびてグニヤ〳〵と
此上なき者と思ひ詰め
舘を脫け出でエデン川
流し渡りて波斯の國

人も有らうに出齒男
鼻頭に印した赤痣は
見れば牡丹か櫻花
笑ふ姿を眺めては
思ひ初めたが病付で
人目を忍び結び昆布
寢屋の衾の友彥を
手に手を取つて兩親が
人目の關や涙川
水火を合はして遠近と

三十男に手を曳かれ　蜜より甘き囁きに
肝腎要の　魂を　抜かれて笑壺に入り乍ら
廻り〳〵て印度の國　錫蘭島に打渡り
小さき庵を結びつゝ　お前と私との其仲は
假令天地は覆るとも　月日は西より昇るとも
千代も八千代も永久に　ミロクの世までも變るまい
竹の柱に茅の屋根　手鍋提げても厭やせぬ
ぞつこん惚れた二人仲　天地の愛を一身に
獨占したる面色に　二月三月と暮す内
小糸の姫は漸うに　男の臭氣が鼻につき

熱き戀路も日を追うて　薄れ冷たきあき風に
吹かれて變る冬の空　雪にも擬ふ玉の肌
冷えては最早熱もなく　隙さへあらば飛び出して
理想の夫に身を任せ　社交の花と謳はれつ
時めき渡るも女子の　誇りと心機一轉し
うるさくなつた友彦の　酩酊を幸ひ一通の
三行半を遺し置き　あとは野となれ山となれ
男早魃もなき世界　如何なり行くとマヽの川
浮いた心の捨小舟　戀のイロハの意氣を棄て
櫓を操りて印度洋　浪のまに〳〵漕ぎ出せば

何の容赦も荒海の
正面衝突メキ〳〵と
飛んで出でたる折もあれ
五十子の姫の神船に
洋の眞中に泛びたる
人氣の荒き島人に
鰻上りに島國の
神の敎に歸順して
黄龍姫の物語
身を横たへて太平の

忽ち船は暗礁に
碎けて魂は中天に
三五敎の宣傳使
ヤツと救はれ太平の
龍宮島に上陸し
日頃のおキャンを應用し
女王と仰がれ三五の
誠の道を傳へたる
褥の船にウキ〳〵と
洋をばこゝに瑞月が

男波女波を照しつゝ
心の色は眞澄空
北斗の星に取卷かれ
鉛の筆を研ぎすまし
ペン〳〵だらりと述べ立つる

唯一言も漏らさじと
神のまに〳〵誌し行く
御靈幸はひまし〳〵て
いと逞やかに編み終せ
救ふ梨ごならせかし

天涯萬里の物語
北極星座に安臥して
七劍星に酷似せる
千代に傳ふる萬年筆の
手具脛引いて松村氏

耳を欹て息こらし
あゝ惟神々々
二十四卷の物語
世人を神の大道に
天地四方の大神の

御前に祈り奉る。

○

海中に浮かべる錫蘭島は、昔はシロの島と云つた。バラモン教の鬼熊別が部下に仕へし雉子と云ふ男、世才に長けた所より、巧言令色の限りを盡し、鬼熊別夫婦に巧く取り入り、夫婦の覺え芽出度く、遂には拔擢されてバラモン教の宣傳使となり、名も友彦と改められた。得意の時に圖に乘るは小人の常、友彦は何時しか野心の芽を吹き出だし、追々露骨となりて、夫婦が掌中の玉と愛で慈む一人娘の小糸姫に目をつけた。友彦の心の中は、夫婦が最愛の娘さへ我手に入らば、鬼熊別の後を襲ひ、天晴れバラモン教の副棟梁、あわよくば鬼雲彦の地位を奪ひ、野心を充さんと晝夜間斷なく心慮をめぐらして居た。

○

鬼熊別夫婦はエデン河を渡り、對岸の小高き丘に登り、數多の從臣と共に花見の宴を催し、酒に醉ひ潰れ、舌も廻らぬ千鳥足、踊り狂ひつ天下の春を獨占せし心地して、意氣揚々と、再びエデンの河を渡り此方に向つて歸り來る。鬼熊別は酩酊甚しく、船中にて手を振り足踏み鳴らし踊り狂ふ惡酒の、無暗に鐵拳振廻し、あたり構はず從臣を擲りつけて興がつて居た。一人の從臣は鬼熊別の鐵拳を避けんと、周章狼狽き、逃げまはる機みに、船端に立てる今年十五才の小糸姫の身体に衝突した途端、小糸姫は『アッ』と一聲、渦卷く波に落ち込み、後白波となつて了つた。

鬼熊別夫婦を初め船中の人々は、初めて醉も醒め『アレヨ〳〵』と立騒げども、小糸姫の姿は見えず、狹き船中を右往左往に狼狽へまはる。此時身を躍らして赤裸の儘、河中に飛び込ん

だ二人の男がある。一人は小糸姫に衝突した三助、一人は友彦であつた。友彦は水練に妙を得浮きつ沈みつ、姫の行方を足もて探り〳〵、立泳ぎしながら流れ行く。漸く姫の姿をみこめた時は、既に十數丁の下流であつた。友彦は小糸姫を小脇に抱へ込み、河邊を辛うじて攀登り、水を吐かせ、種々雜多こ手を盡し、漸くにして蘇生せしめ、意氣揚々こして鬼熊別が館に立歸つた。

是れより先、鬼熊別夫婦は數多の人數を召び集め、小糸姫の陷りし河の邊を力限りに搜索し到底絶望こ諦め、我家に立歸り、夫婦互に我子の不運を歎き悲しみ、涙に暮るゝ折しも、友彦は小糸姫を背に負ひ、門番に送られ、得意の色を滿面に漂はし、揚々こして入り來る。鬼熊別夫婦は此態を見て驚喜し、

鬼熊別『ヤア小糸姫、無事であつたか、如何してマアあの激流に生命が助かつたか』

蜈蚣姫『ア、娘、よく歸つて呉れた。是れこ云ふも、全く大自在天樣のお惠だ。ア、有難い〳〵。……おやぢさん、ごうぞモウ此れからは妾が何時も云ふ通り、大酒は廢めて下さい。酒の祟りで斯んな心配をしたのも、全く大自在天樣のお氣付けであらう……生命の親の大神樣……』

こ泣き沈む。友彦は怪訝な顏。

友彦『モシ〳〵お嬢さん、チツト貴女何こか仰有つて下さいませ。神樣も神樣だが生命の親は誰で御座いましたかなア』

小糸姫『お父さん、お母さん、妾既に緋切れて居りましたのよ。そこへ此友彦が生命を的にして妾を救つて呉れました。澤山な家來はあつても、妾を生命がけになつて助けて呉れた者は友彦一人、生命の親は友彦で御座います。ごうぞ褒めてやつて下さいませ』

夫婦は一度に友彦の顏を眺め、顏色を和らげ、

鬼熊別『ヤアお前は常々から氣の利いた男だと思つて拔擢して宣傳使に命じたが、わしの眼で睨んだ事はチツトも違はぬ。お前ばつかりだ。これだけ澤山に居つてもマサカの時に間に合ふ奴は一人も有りはせぬ。ようマア働いて呉れた。第一番の手柄者だ』

友彦『これしきの事にお褒めの言葉を頂きまして實に汗顏の至りで御座います。今承はれば貴方樣は、これだけ澤山の家來があつても、マサカの時に間に合ふ奴は無いと仰せられましたが、第一バラモン教の幹部の役員が分らぬからで御座いますよ。神樣のお道は看板、自分の出世することのみを考へて居る連中ばかりで、自分より優つた者が現はれると、何とか彼とか申して物言ひを付け、頭を押へようとするものですから何程立派なバラモン教でも、誠の神柱は皆逃げて了ひます。何時までも世は持切りにさせぬと神樣が仰せられるのに、今の幹部は何時までも高い所へ上つて權利を掌握しようと思ふ卑劣な心がありますから、至誠の者や少し間に合ひさうな人物は皆壓迫を加へ排斥を致します故、何時まで經つても幹部の改造をするか、幹部連がモウちつと神心になり、心の立替立直しを行つて呉れぬ事には駄目です、何程天に日月輝くとも、途中の黑雲の爲に光は地上に屆きませぬ、私の樣な立派な至誠の者が隱れて居つても、人格を認める目もなし、又認めても自分の地位を守る爲に却て排斥を致すのですから立派な者は皆隱れて了ひ、粕ばかりが浮上つて居るのです。石混りの塵芥を水溜りへ一掬み放かして見ると、重みのある充實した石は忽ち水の底に沈み、落着き拂つて居りますが、塵芥はバツと上に浮いて、風のまに〳〵浮動して居る樣なものです。稻の穗の稔るに從ひ頭を下げ俯むく樣に、充實した至誠の者は皆謙遜の德を守り、實の入らぬ稻穗はツンとして空を向いて居る樣なもの、是れでは到底バラモン教

も發達は致しますまい。併し乍ら、貴方樣は賢明なお方で、この友彦が實力をお認め遊ばし、土塊の如く幹部より取扱はれて居た雉子を重用して宣傳使にして下さつたのは、實に天晴れな御鑑識、友彦も……あゝ私は何こした立派な主人を持つただらう。私の樣な幸福者は又こ世界にあるまい……こ存じます。聖人野にありこか申しまして、誠の貴方の御力になり、教の後を繼ぐ樣な人物……言はゞ御養子になるこ云ふ人物は、幹部に是れだけ澤山、表面立派な宣傳使はあつても、滅多に御座いますまい。餘程御養子の御選擇は……如才は御座いますまいが……御注意を拂つて頂きたいもので御座います。何程容貌は惡くても魂さへ立派であれば鬼熊別副棟梁樣の後が繼げまする』

こ調子に乘つて勝手な理窟を並べ立て得意がつて居る。鬼熊別はニコ〳〵し乍ら、

鬼熊別『友彦……お前は顏にも似合はぬ高遠な理想を抱いて居る者だ。我々こても同じ事、中中棟梁の家來は得られないものだ。たま〳〵力にならうこ思ふ人物が現はれるこ、忽ち雲が邪魔して光を隱さうこする。今の幹部だつて其通りだ。大自在天樣の教に照して見れば一人こして及第する者はあるまい。耳を塞ぎ、目を閉ぎ、口をつまへて、神直日大直日に見直し聞直して居ればこそ、得意になつて幹部面をさらして居るのだが……ア、是れを思へば人を使ふこ云ふ事は難事中の最大難事だ。肩も腕もメキ〳〵する樣だ。ごうしてこれだけ身勝手な沒分曉漢ばかりが、バラモン教の幹部には集つて來るのだらうなア』

こ吐息を漏らす。

蜈蚣姫『屍の在る所には鷲集まり、美味の果物には害虫密集するこやら、蟻の甘きに集ふ如く、良い所へは惡い者が來集つて來るものだ。これからは今迄の樣な和光同塵式は根本革正して、變性男子的にバキ〳〵こ率直に、嚴肅にやらねば、何時まで經つてもバラモン教

は駄目で御座いますよ。それだから妾も貴方に推薦して雉子を宣傳使にしたのぢやありませぬか。妾が雉子を推薦した時、貴方は何と言はれました。「彼奴は見掛けによらぬ間に合ふ男だが、あんな男を推薦すると幹部の連中の氣に入らぬから、雉子の人物は認めてゐるが、どうも仕方がない」……と優柔不斷な事を仰有つたぢや御座いませぬか。あの時に御採用になつたればこそ、幹部として今日の花見の宴に同行致したお蔭で、一人娘が生命を拾うたではありませぬか、雉子を雉子の儘に置いてあつたなれば、どうして今日の花見の供が出來ませう。さうすれば忠義を發揮する機會もなし、見す〳〵可愛い娘を見殺しにせねばならなかつたでは有りませぬか。チト是から確かりやつて下さらぬと駄目ですよ』

鬼熊別『さうだなア、副棟梁の爲には何時でも生命をあげますとか粉骨碎身犬馬の勞を惜まぬとか云つて居た幹部の連中のあの態、俺も實は呆れて物が言はれないのだ』

友彦は得意顏にて、

友彦『「伸びる程土に手をつく柳かな」……とか言ひまして、地に落ちて居るもの程立派な者が御座いまする。立派な人格者が御座います。「氣に入らぬ風もあらうに柳かな」……といふ……幹部が……精神になりさへすれば、バラモン教は旭日昇天の勢で天下無敵の勢力が加はりまする。されど利己主義の猜疑心の深い頭抑への連中計りが幹部を組織して居つては、到底發展の見込みは有りませぬ。現狀維持が出來ればまだしも上等、日向に氷の樣に、日に〳〵衰へるは明瞭なる事實で御座いませう。どうぞ副棟梁樣、今後は情實に絡れず、適材を適所に拔擢して、神業第一と御心得遊ばして忌憚なく正邪賢愚を御立別けの上、御採用あらん事を懇願致します』

小糸姫『お父さん、妾は大勢の役員信者の中でも、本當に偉いのは友彦一人だと思ひますワ』

蜈蚣姫『オホ、、、、子供と云ふものは正直なものだ。實際の間に合うたのは友彦だけだ。ナアモシ鬼熊別様』

鬼熊別は俯むいて當り障のない様な返辭で『ウウン』と云つて居る。蜈蚣姫は夫に向ひ、

蜈蚣姫『今日は花見の宴で澤山なお酒を幹部一同戴き、まだ充分の醉も醒めず、此上悦びの酒宴を催すのは妙なものだが、併し乍ら大切な娘の生命を拾つたのだから、神様に御禮のお祭をなし、手輕い直會の宴でも開いて、友彦の表彰會を行はねばなりますまい。どうお考へなさいますか』

と夫の顏を覗き込む。

鬼熊別『アヽさうだ。何と云つても神様に御禮の祭典を行ひ、次に友彦の手柄を表彰せなくてはなるまい。賞罰を明かにせないと、今後の爲にならぬから……ヤア片彦、釘彦の兩人、祭典の用意に取かゝり、次で直會の宴を開くべく準備して呉れ。そして今日は恩顧在住の信徒、老若男女を問はず、殘らず八尋殿に集めて酒宴の席に列せしめるのだから……』

片、釘の兩幹部は此一言に、又も酒かと雀躍りし乍ら『ハイ〳〵』と二つ返事で此場を立出で、部下一般に通達した。

祭典は命の如く行はれた。御祝ひを兼ね、信者は立錐の餘地なきまでに、八尋殿に溢れ出した。祭典は無事に濟み、直會の神酒は子供の端に至るまで万遍なく配られた。小糸姫が無事安全を祝ふ聲、殿内も搖ぐ許りであつた。小高き壇上に現はれたのは鬼雲彦の棟梁である。鬼雲彦は一同を見廻し、

鬼雲彦『バラモン教の幹部を初め信者一同と共に小糸姫の無事安全を祝し奉り、鬼熊別御夫婦の御幸運をお悦び致します。つきましては私として少し感想を述べたいと思ひます。

大勢の中には少し耳障りの方もお有りなさるかも知れませぬが、バラモン教の教主兼棟梁としては已むを得ない立場で御座いまするから、其處の所は宜しく御諒解を願つて置きます。抑も多士濟々たる本教は、開設以來旭日昇天の勢で御座います。これと云ふのも全く幹部を始め信者一同が、有るに有らずぬ困難と戰ひ、所有困苦をなして、忍びに忍んで心魂を鍛へて來た結果と私は信じます。常世の國より渡來して、埃及のイホの都に始めて教を開いた時、コーカス山に根據を構へたる三五教の爲に種々雜多の妨害を受け、一時は孤城落日の破目に陷つた所、皆樣はよく耐忍び、漸くにしてバラモン教は再び以前に勝る隆盛の域に達しました。併し乍ら艱難の極度に達した時は榮えの種を蒔くものです。今日のバラモン教は稍小康を得、日々隆盛に趣くに連れて人心弛緩し、知らず識らずの間に倦怠の心を生じ、今日では最初の熱列なる忠誠なる皆樣の精神は何處へやら喪失し、幹部は自己を守る爲に高遠達識の士を排除し、阿諛諂佞の徒を重用し、各自競うて部下を作り互に權力を爭ふ如き傾向が仄見えて參りましたのは、本教の爲に誠に悲しむべき現象と言はねばなりませぬ。現に鬼熊別樣の娘子小糸姫樣の遭難に對しても、肝腎の幹部は袖手傍觀手を下すの術を知らず、實に無誠意、無能力を極端に發揮したでは有りませぬか、斯樣な事で如何して神聖なる御神業に奉仕する事が出來ませう。神に仕へ奉るにあらずして、利己心といふ慾心に奉仕するのだと云はれても、辯解の辭はありますまい。今日はバラモン教に對して國家興亡の境で御座います。教主として私の申す事が肯定出來ない方々は御遠慮に及びませぬ。ドシ〳〵と脫會下さつても、少しも痛痒は感じませぬ。否寧ろ好都合だと確心致して居ります。本當の大神の御心が分つた方が一二人あれば澤山です。それを種として立派に教が行はれませう。然し乍ら肝腎の幹部たる者、神意を誤解し、利己主

義を强持するに於ては、一匹の馬が狂へば千匹の馬が狂ふ譬の如く、總崩れになつて了ふものです、それだから幹部の改心が先づ第一等であります。源濁つて下流澄むと云ふ道理は御座いませぬ。どうぞ此際皆さんは申すに及ばず、幹部の地位に在る方々から誠心誠意、神業の爲寛容の德を養ひ、淸濁併せ呑み己を責め人を赦す大人の態度になつて頂きたいものです』

と諄々として鋭鋒を幹部の面々に指し向けた。幹部の連中は教主鬼雲彦の此教示に對し、餘り快く感じなかつた。されど一々胸を刺さるゝ此箴言に、返す言葉もなく唯冷然として、空吹く風と聞き流し居る者も少くなかつた。

此時得意の鼻を蠢かして壇上に大手を振り乍ら、眼をキヨロ〳〵廻轉させ、一同の顏を眺めつつ現はれた一人の宣傳使は、小糸姫の生命を救うた友彦であつた。拍手の聲急霰の如く、場の四隅より響き亘つた、友彦は滿場に向ひ輕く一禮し、稍反り身になりて赤い鼻をピコツかせ乍ら、無細工な缺げた出齒をニユツと噛み出し、厭らしき笑を湛へて握拳を固め、卓を一つトンと打ち、雷の如き蠻聲を張り上げ『皆さん』と一喝し、

友彦『私は只今の教主樣の御演說につき感慨無量で御座います。皆樣の大多數に置かせられましても、敬神、愛教、愛民の教主の御心中に、嘸嗚咽感激遊ばした事と確信致します。我々は大慈大悲の大神樣は申すも更なり、教主樣の仁慈無限の御精神に酬い奉り、副教主として、重任の地位に着かせ給ふ鬼熊別樣の教を思ひ給ふ御熱情に對し、どこ迄も粉骨碎身、以て微力の有らぬ限りを盡さねばならないではありませぬか。然るに今日の幹部は偸安姑息、大事に際して躊躇逡巡、なす所を知らずと云ふ爲體では御座いますまいか』

聽衆の中より『贊成々々』と手を拍つ者四隅より現はれて來た。此聲援に力を得て友彦は益

益語氣を強め、

友彦『現にエデン河の小糸姫様の遭難に對し、幹部の御歴々は如何なる活動をなされましたか幹部の總統たる片彦、釘彦の御兩人は、我より以下の者共早く河中に飛び込み御救ひ致せ……と云ふ様な御態度でいらつしやる。次の幹部は又次へ、又次へ、我々幹部にあつては人を統率すれば良い、命令權を持つて居るのだから、直接活動すれば幹部の沽券を傷づけると云はぬばかり、次から次へ押せ〳〵に危ない事は塗りつけ合ひ、唯一人として身を提し御救ひしようとする方々はなかつたぢやありませぬか。日頃のお言葉に似ず、實に冷淡極まる振舞、斯様な事でどうして神業が發展致しませうか。我々は實に遺憾に存じます』と又もや卓を叩く。場内は『賛成々々』『尤も〳〵』の聲破るゝ許りに響き渡り、中には兩手をあげて躍る者さへ現はれた。友彦は尚も語を繼ぎ、

友彦『皆さん、今日はバラモン教の立替の時機ではありますまいか。上流濁つて下流澄むと云ふ道理はありますまい。舍身的活動をなす至誠の士……例へて見れば九死一生の人の危難に際し、生命を的に助けに行く丈の眞心を持つた眞人をして、幹部の總統たらしめなば、名實相伴ふ所の立派なるバラモン教が築き上げられ、神政成就の大望も容易に運ぶでせう抑も幹部たるものは重大なる責任が御座いますから、自己の安全のみに焦慮する如き人物は、この際信者多數の團結力を以て、根本改革を致さねば、迚も完全なる教は立ちますまい。何卒皆様の御熟考を煩はす次第で御座います』

と結んで降壇せんとするや、片彦は怒氣を含み、拳を固め、壇上に現はれた。參集者の中より『下がれ』『退却』『無腸漢』『利己主義の張本人』なぞゝ、頻りに罵聲を浴びせかけ、喧々囂々鼎の湧くが如く、片彦は壇上に立往生の儘一言も發し得ず、唇をビリつかせて居る。鬼

雲彦、鬼熊別兩夫婦は信者一同に輕く一禮し、館に悠々として立歸る。友彦も續いて退場する一同は片彦を壇場に殘し、先を爭うて各々住家に歸つた。あとには幹部の錚々たる者合せて十二人何事かヒソ〳〵と話に耽つてゐる。

忽ち聞ゆる暮の鐘、諸行無常と鳴り響き、八尋殿の屋根に止まつた二羽の鴉、大口あけて『アホー〳〵』と鳴きたてる。

（大正一一・六・一四　舊五・一九　松村眞澄錄）

第二章　啞

啞（七三二）

友彦は鬼熊別夫婦の信任益々厚く、遂には鬼熊別が奥の間に内事係の主任として仕ふる事となつた。小糸姫も朝な夕なに友彦の親切にほだされ、好かぬ顏とは思ひ乍らも何時とは無しにスツカリ無二の力と頼むやうになつた。蔭裏に生えた豆でも時節が來ればはぢける道理、十五の春を迎へたオボコ娘も、何時とはなしに聲變りがし、臀部の恰好が餘程大人びて來た。男女の交情を結ぶ第一の要點は談話の度を重ぬること、會見の度の多きこと、及び時間の關係に大影響を及ぼすものである。

小糸姫は何時とはなしに友彦の顏を見る毎に、顏赤らめ、襖の蔭に隱れ、窃み目に覗くやうになつた。蜈蚣姫は信任厚き友彦に、小糸姫の身邊の世話を委托した。遠近上下の隔てなきは

戀の道、優柔不斷フナ〳〵腰の友彦も何時こは無しに妙な考へを起し、遂には小糸姫の夫こなつてバラモン教の實權を握らんこ、野心の火焔に包まれ晝夜心を焦して居た。

友彦が募る戀路に、小糸姫は襖の開閉にも、摺れつ縺れつ相生の松こ松この若緑、手折るものなき高嶺に咲いた松の花、遂に友彦が得意の時代は到來した。猪食た犬の蜈蚣姫は敏くも二人が關係を推知し、夫鬼熊別に向つて言葉を盡し、友彦をして小糸姫の夫こなし、鬼熊別が後繼者たらしめんこする意志を、事に觸れ、物に接し、遠廻しにかけて鬼熊別にいろ〳〵こ斡旋の勞を執つた。

されご鬼熊別は友彦の下劣なる品性こ、野卑なる面貌に心を痛め、到底副棟梁の後繼者こして不適任たるここを悟り、何時も蜈蚣姫の千言萬語を盡しての斡旋を馬耳東風こ聞き流した。

友彦、小糸姫は父の心中を察し、人目を忍んでは二人の行末を案じ煩ひつゝ、ヒソ〳〵話に耽るのであつた。

友彦『小糸姫樣、私は今日限り貴方に御別れ致さねばならぬここが出來ました。今までの御緣こ諦めて下さいませ』

小糸姫は漸く口を開き恥し氣に、

小糸姫『友彦樣、そりや又何うした理由で御座います。たこへ何うなつても小糸姫のためには力を盡し、生命でも差出すこ仰有つたではありませぬか』

友彦『ハイ、私の心は少しも變つては居りませぬ。日に夜に可愛さ、戀しさが彌增し、片時の間も貴女の御顏が見えねば、ジツクリこして居られないやうに、戀の炎が燃え立つて來て居ります。併し乍ら貴女は尊き副棟梁の一人娘、何時までも私のやうな賤しき者こ關係を結ぶ譯には參りませぬ。御父樣の御意中は決して吾々兩人の意を叶へては下さいませぬ。

何程御母上が御取持下さつても、最早駄目だと云ふことが解りました。私は是より此の煩悶を忘れるため、貴女の御側ゟ遠く離れ、世界を遍歴し一苦勞を致しませう。これが御顏の見納めで御座いますれば、何うぞ御兩親に孝養を盡し、立派な夫を持つてバラモン敎のために御盡し下さいませ』

小糸姫は驚いて其の場に泣き仆れ、

小糸姫『アー何うしませう。父上樣、聞えませぬ』

と泣き叫ぶ。

友彥『モシ〳〵御嬢樣、悔んで復らぬ互の緣、暫しの夢を見たと御諦め下さいませ。誠に賤しき身を以て、貴女樣に對し失禮を致しました重々の罪、何卒御赦し下さいませ……左樣なら、これにて愛しき貴女と御別れ致しませう』

と立去らんとするを裾曳き止め、

小糸姫『暫らく御待ち下さいませ。妾も女の端くれ、たとへ天地が變ると、一旦言ひ交した貴方を見捨てゝ何うして女の道が立ちませう。苦樂を共にするのが夫婦の道、假令何と仰有つても、妾は何處までも放しませぬ。何うしても別れねばならなければ貴方の御手で妾を刺殺し、何處へなりと御出で下さいませ』

と泣き俯す。

友彥『ア、困つたことが出來たワイ、別れようと言へば御嬢樣の强き御決心、生命にも係はる一大事、大恩ある鬼熊別の御夫婦に對し申譯が無い。さうだと云つて大切な御嬢樣を伴出しては尙濟まず、ア、仕方がない……。モシ御嬢樣、私も此處で腹搔き切つて相果てます。何うぞ貴女は兩親に仕へて孝養を御盡し遊ばされ、幸に私の事を思ひ出された時は

水の一杯も手向けて下さいませ。千萬人の宣傳使の讀經よりも貴女の御手づから與へて下さつた一滴の水が、何程嬉しいか知れませぬ。小糸姫樣、さらばで御座いまする』

と懷劍スラリと引抜き、腹に今や當てんとする時、小糸姫は其の腕に縋りつき、

小糸姫『モシ〳〵友彦樣、暫らくお待ち下さいませ。お願ひいたし度いことが御座います』

友彦『最早覺悟致した上は申譯のため唯死あるのみ。何うぞ立派に死なして下され』

小糸姫『どうして是が死なされませう。斯うなる上は是非がない。親につくか、夫につくか、落ちつく途は唯一つ。暫時は親に御苦勞をかけるか知れないが、何れ此世に長らへて居れば、御兩親に孝養を盡すことも出來ませう。何卒友彦樣、妾を伴れて遁げて下さいませぬか』

友彦『これはしたり御孃樣、親子は一世、夫婦は二世と申しまして、此世に親ほど大切なものは御座いますまい。友彦ばかりが男ではありませぬ。モット〳〵立派な男は澤山に御座いますれば、私のことは只今限り思ひ切り、兩親に御孝養願ひます。さらば、是にて御別れ……』

と又もや懷劍を突き立てようとする。小糸姫は悲しさやる瀬なく腕に喰ひつき滿身の力を籠めて友彦を殺さじと焦つて居る。

友彦『ア、其處まで私を思うて下さるか。左樣なれば仰せに隨ひ、暫らく私と一緒に何處かへ隱れて、樂しき月日を送りませう』

小糸姫『あゝそれで安心致しました』

と奥に入り、密かに數多の路銀を懷中し、夜の更くるを待つて二人は館を後に、何處ともなく顯恩鄕より消えて了つた。

親子のやうに年の違うた二人の男女は、手に手をこつて波斯の國を、彼方此方こ彷徨ひ、遂には高山を幾つか越えて印度の國の南の端に進んで來た。此處には露の都こ云つて相當な繁華な土地がある。バラモン教の宣傳使市彦は相當に幅を利かし、遠近に名を轟かして居た。友彦は斯る地點に彷徨ふは、發覺の虞ありこなし、月の夜に紛れて海を渡り、セイロンの島に漕ぎつけ、奥深く進みシロ山の谷間に居を構へ、二人は暮す事こなつた。物珍らしき島人は、花を欺く小糸姫の容貌を見て、天女の降臨せしものこ思ひ尊敬の念を拂ひ、日夜此の庵を訪ねて參拜するもの引きも切らぬ有樣であつた。小糸姫は表向友彦を下僕こなし、女王氣取りで無鳥島の蝙蝠王こなりすまし、友彦こ共に日夜快樂に耽つてゐた。

友彦の俄に塗りたてた身魂の鍍金は、日に月に剝脱し、父母兩親の目の遠く離れたるを幸ひ横柄に小糸姫を頤の先にて使ふやうになつた。さうして小糸姫が持ち來れる旅費を取出しては

日夜酒に浸り、或は島人の女に對し他愛なく戯れ出した。小糸姫は、漸く戀の夢醒むるこども に、友彦の言ふこと爲すこを、蛇蝎の如く忌み嫌ひ、友彦の方より吹きくる風さへも、身を切る如くに感じた。百度以上に逆上せ切つた戀の夏も何時しか過ぎて、ソロ〳〵秋風吹き起り日に〳〵冷氣加はり凩寒き冬の如く、友彦を思ふ戀の熱はスツカリ冷却して氷の如くになつて了つた。

友彦は小糸姫の樣子の日に〳〵つれなくなるに業を煮やし、時々鐵拳を揮ひ、自暴酒を呑み嗄がれ聲で呶鳴り立て、二人の仲は日に夜に反が合なくなつてしまつた。

或夜小糸姫は友彦が大酒を煽り、酔ひ潰れたる隙を窺ひ、一通の遺書を殘し、濱邊に繫げる小舟を漕ぎ、島人の黑ん坊二人を伴なひ、太平洋を目蒐けて大膽にも遁げ出した。

友彦は酒の酔が醒め、起き出で見れば夜はカラリこ明けてゐる。

友彦『小糸姫、水だ〳〵』

呼べど叫べど何の應答もせぬ。

友彦『ア、又裏の山へでも果物を取りに往きよつたのかなア。何を云うても御嬢さんで氣儘に育つた女だから仕方が無い。併し斯う云ふものゝ、まだ十六だから子供の樣なものだ。餘りケン〳〵云つてやるのも可哀想だ。チツトこれから可愛がつてやらねばなるまい。顯恩郷に居れば、彼方からも、此方からも御嬢さんと奉られ、女王の樣に持て囃され、榮耀榮華に暮せる身分だ。此の友彦が思はぬ手柄に依つてそれをきつかけに旨くたらし込み、世間知らずのオボコ娘をチヨロマカした俺の腕前、定めてバラモン教の幹部連も驚いたであらう。俺の顏は自分乍ら愛想の盡きるやうなものだが、それでも生命の親だと思つて、すねたり、跳たりし乍ら附いて居るのはまだ優らしい。たとへ俺を嫌つて逃げ歸らうと思つても、遠き山坂を超え斯んな離れ島へ連れ込まれては、孱弱き女の何うすることも出來よまい。思へば可哀想なものであるワイ……ア、喉が渇いた。一つ友彦自ら玉水を、汲んで御飲り遊ばす事としよう』

と云ひ乍ら、門前を流るゝ谷川の水に竹製の柄杓を突込み、グイと一杯汲み上げ聲を變へて、

友彦『さア、旦那樣、御上り遊ばせ。あんまり御酒を上りますと御身のためによろしく御座いませぬ。若しも貴方が御病氣にでも御なり遊ばしたら、妾は何うしませう。ねー貴方、妾が可愛いと思召すなら、何うぞ御酒を餘り過ごさない樣にして頂戴……なんて吐しやがるのだけれど、今日に限つて若山の神樣は何處かへ御出張遊ばした。嬶て御歸館になるだらう。それまで山の神の代理を勤めるのかなア』

と獨語言ひ乍ら、グツト一杯飲み乾し、

友彦『ア、醉醒めの水の美味さは下戸知らずだ。ア、うまい〳〵、水も漏らさぬ二人の戀仲、媒酌人も無しに自由結婚と洒落たのだから、此の杓を媒酌人と假定して先づ一杯やりませう。何程しやくだと云つても、黽恩鄕を遠く離れた此の島、二人の戀仲に水差す奴も滅多にあるまい。併し乍ら小糸姫が時々癪を起すのには、一寸俺も困る……「もしわが夫樣癪がさしこみました。ごうぞ御介錯を願ひます」……なんて本當になまめかしい聲を出しやがつて、俺は何時もそれが癪に障……らせぬワ。ア、うまい〳〵』

と、汲んでは飲み〳〵一人興がつてゐる。

斯かる處へ黑ン坊の一人現れ來り、

黑ン坊『モシ〳〵友彦樣、女王樣が夜前船に乘つて何處かへ往かれたのを、貴方御存知で御座いますか』

と聞くより友彦は眞蒼になり、

友彦『何ッ、小糸姫が船に乘つて此處を去つたとは、そりや本當か』

黑ン坊『何私が嘘を申しませう。チヤンキーとモンキーの二人が、櫓櫂を操り港を船出しましたのを、月夜の光に慥に見屆けました。私ばかりでない、四五人のものがみんな見て居ります』

友彦『そんなら何故早速知らして來ぬのだ』

黑ン坊『早速知らせに參つたのですが、御承知の通り此の急坂、さう着々と來られませぬ』

友彦『さうして小糸姫は何處へ往つたか知つて居るか』

黑ン坊『そこまではハッキリしませぬが、何でも舳を印度の國の方へ向けて出られましたから大方露の都へ御超しになつたのでせう』

友彦は兩手を組みウン〳〵と吐息を吐き、兩眼より粗い涙をボロリ〳〵と溢して居る。暫くして友彦は立上り、

友彦『おのれチャンキー、モンキーの兩人、大切な女房を唆かし、何處へ遁げ居つたか、たとへ天をかけり、地を潜る神變不思議の術あるとも、草をわけても探し出し、女房に會はねば置かぬ。其時にチャンキー、モンキーの二人を血祭りに致して呉れん』

と狂氣の如く荒れ狂ひ、鍋、釜、火鉢を投げ、戸障子に恨みを轉じ、自ら亂暴狼藉の限りを盡し、家財を殘らず滅茶苦茶に叩き破し、小糸姫の殘し置いた衣服や手道具を引裂き、打碎き、地團駄踏んで室内を七八回もクル〳〵と廻り狂ひ、目を廻してバタリと倒れた。

黑ン坊の一人は驚いて側に駈寄り、

黑ン坊『モシ〳〵友彦樣、狂氣めされたか。マア氣を御鎭めなされ、何程焦つても追ひつくことは出來ますまい。何れ印度の國の露の都に市彦と云ふ名高い宣傳使が居られますから、其處へ大方御越しになつたのでせう』

友彦は此の聲にハツト氣がつき、

友彦『何ッ、市彦が何うしたと云ふのだ』

黑ン坊『大方女王樣は露の都の市彦の館へ御越しになつたのだらうと、皆の者が噂を致して居りましたと云ふのです』

友彦『それは貴樣、よく知らせて呉れた。さア、駄賃をやらう』

と金嚢を開き見れば、こは如何に、空ッけつ勘左衛門、銭一文も殘つて居ない。函の底に殘つた折紙を手早く攫み披き見て、

友彦『ア、何だか些も分らない。スバルタ文字で……意地の惡い、俺の讀めぬのを知り乍ら

遺書をして置きやがつたのだらう。併しこれは後の證據だ。大切にせなくてはならない』と守り袋の中に大事相にしまひ込み、黑ン坊に案内させ、一生懸命にシロ山の急坂をドン〳〵威喝させ乍ら、大股に降り行く。

漸くシロの港に駈ついた。滅法矢鱈に黑ン坊と二人がマラソン競走をやつた結果、港に着くや、氣は弛みバッタリと此處に倒れて了つた。港に集まる黑ン坊は二三十人寄つて集つて水をかけたり、鼻を捻ぢたり、いろ〳〵として漸く氣をつけた。

友彦は四邊をキヨロ〳〵見廻し乍ら、

友彦『オー此處はシロの港だ。さア、汝等一時も早く船の用意を致し、印度の國へ送れ』

黑ン坊の一人『賃錢は幾何呉れますか』

友彦『エーこんな時に賃錢の話どころか、一刻も早く猶豫がならぬ。賃錢は望み次第後から遣はす。さア、早く行け』

と急き立てる。

友彦の懷中は實際無一物であつた。八人の黑ン坊は八挺櫓を漕ぎ乍ら矢を射る如く友彦の命のまに〳〵印度洋を横切り、印度の國の濱邊へ漸く着いた。此處は眞砂の濱と云ひ遠淺になつてゐる。船は十町ばかり沖にかゝり、それより尻を捲つて徒歩上陸する事となつてゐる。

黑ン坊『モシ〳〵大將さん、賃錢を頂きませう』

友彦『ウン一寸待て、賃錢はシロの港まで歸つた時、往復共に張りこんでやる。二度にやるのは邪魔臭いから、此處に船を浮かべて待つてゐるがよからう』

黑ン坊『さうだと云つて……露の都までは二日や三日では往けませぬ。往復十日もかゝるのに、こんな處に待つてゐられますか』

友彦『待つのが嫌なら先へ歸つてシロの港で待つてゐるがよからう。歸途には又他の船に乘るから……』

黑ン坊『そんなこと言はずに渡して下さいなア。女房が鍋を洗つて待つてゐるのですから』

友彦『實は金をあんまり周章て忘れて來たのだ』

黑ン坊『へンうまいこと云ふない。女王にスッパ抜けゃ喰はされ、金も何も持つて遁げられたのだらう。今までは女王樣の光りで、貴樣を尊敬して居つたが、モー斯うなつちや誰が貴樣に隨ふものがあるか。金が無ければ仕方がない。貴樣の身につけたものを殘らず俺に渡せ。グヅ〳〵吐すと、寄つて集つて此の海中へ水葬してやらうか』

友彦『エー仕方が無い、そんなら暑い國の事でもあり、裸でもしのげぬ事は無いのだから、これなつと持つて行け』

とクル〳〵と眞裸になり、船の中に投げつけた。

黑ン坊『思ひの外立派な着物だ。何分金にあかして拵へやがつた品物だから……オイその首にかけて居る守り袋を此方へ寄越せ』

友彦『之に貴樣等が手を觸れると、忽ち身体がしびれるぞ。さア持つて行け』

と首を突き出す。八人の黑ン坊は、

黑ン坊『ヤア、そんな怖ろしいものは要らぬワイ。勝手に持つて行け』

と云ひ捨て遠淺の海に友彦を殘し、八挺櫓を漕ぎ、紫の汐漂ふ海面を矢の如く歸つて行く。

友彦は砂に足を沒し、已むを得ず首に守袋をブリンと下げ、飼犬よろしくと云ふスタイルで遠淺の海をノタ〳〵と、四つ這ひになつて岸邊を指して進み行く。

（大正一一・六・一四　舊五・一九　外山豐二錄）

第三章　波濤の夢（七三三）

野卑下劣なる友彦の態度にぞつこん愛想をつかし、ぞゝがみを立て蛇蝎の如く忌み恐れたるセイロン島の女王小糸姫は、友彦が大酒に醉ひ潰れ、前後不覺になつた隙を窺ひ三行半を後に殘し、黄金を腹卷にごつさりと重い程締込み錫蘭の港より、黑ン坊チヤンキー、モンキーの二人に船を操らせ、月照り渡る海原を力限りに辷り往く。

天上には淨玻璃の鏡巖かに懸り、大地の水陸森羅萬象を映して居る。小糸姫が今往く此船も、矢張り月の面にかゝつた天然畫中のものであらう。小糸姫は漸く虎口を逃れホツト一息つきながら獨言……。

小糸姫『ア、妾程罪深い者が世に有らうか。山より高き父の恩、海より深き母の恩、恩に甘え親の心子知らずの譬に漏れず、人も有らうに、萬人の見て以て蛇蝎の如く忌み嫌ふ友彦のやうな下劣な男に、何うして妾は迷つたであらうか。我と我身が怪しくなつて來た。執念深き男の常として、嘸今頃は醉も醒め、四邊をキヨロ〳〵見廻し、我殘せし手紙を見てアツト腰を拔かし、例のいゝいゝ目を剝き出し、嘸や嘸、腹を立てゝ居るだらう。思へば可憐さうな樣でもあり、小氣味がよいやうにもある。妾の心は鬼か蛇か神か佛か、我と我が心を解き兼ねる。それにしてもあの友彦と云ふ男、金さへあれば朝から晩まで飲み倒し、體を碎き魂を腐らせ、殆んど人間としての資格は最早ゼロになつて仕舞つた所だから、今度の驚きで些とは性念も直るであらう。眞人間にさへなつて呉れたならば、妾とても別に憎みはせぬ。あの男に一片良心の光があれば、キツト心を取り直し、立派な人間になるであらう。さすれば今見捨てゝ逃げ出す妾の非常手段も、あの男の爲には却つて幸福の種、

腐つた魂は清まり、酒に碎けた肉体は又元の如く健かになり、神界の爲、社會のために活動するだけの神力が備はるであらう……友彦殿、妾が書置を見て嘸憤慨して居るであらう。併し乍ら之も妾が御身に對する惠の鞭だと思つて、有難く感謝するがよいぞや。必ず〳〵迷うてはならないよ。破れ鍋に閉ぢ蓋、それ相當の女を見つけ出して夫婦仲よく暮しやんせ。提灯に釣鐘、釣り合ぬは不緣の基と云ふ事は昔からの金言友彦の守護神殿、肉体、いざさらば之にて萬刼末代お別れ致します』

と頤をしやくり、傍に人無き如き横柄なスタイルにて喋り立てゝ居る。無心の月は淨玻璃の鏡の如く眞澄の空に緩やかに懸り、小糸姫が船中のモノログを床しげに見詰めて聞いて居るものゝ如くに思はれた。チャンキー、モンキーの二人は大海原の眞中に浮び出たのを幸ひ、目と目を見合せ、そろ〳〵肩を聳やかせながら體まで四角にして、機械人形の樣に小糸姫の兩脇に

チヨコナンと坐り、

チャンキー『何と今日のお月樣は、まんまるい綺麗なお顔ぢやないか。恰で小糸姫女王のやうな、玲瓏たる容色。空を仰げば如意寶珠の如き月光如來、船中を眺むれば雪を欺く純白の光明女來の御出現、俺達も男と生れた上は、一つこの樣な美人と握手をしたいものだなア、アハ、、、』

と作つたやうな笑ひ聲を出す。

モンキー『オイ、チャン、擽つたいやうな遠廻しにかけて何を云ふのだ。一里や二里ならまだしもだが、大空のお月さん迄引張り出しやがつて、そんな廻り遠い事は今の世には流行せないぞ。何事も簡單敏捷を貴ぶ世の中だ。海底にも此通り立派な月が浪のまに〳〵漂うて居る月の上を渡る此船は、天人の乘つた天の鳥船も同樣だ。これ見よ……海の底には幾十

萬さも知れぬ星の影、月さ月、星さ星さに包まれた此大空假令俺達の色が黑いさ云うても唇が厚いさ云うても、最早此通り天上を翔る樣になつたのだから、顯恩鄕のお姫樣に何遠慮する事があるものかい。僅か十六歲の纖弱き女、此通り頑丈な鐵のやうな固い腕をした我々の自由にならぬ道理があるか。際限も無き此海原、何一つ樂しみなくして何うして之が勤まらう。……これ小糸姫さん、お前の家來ださ云うて連れて居つた友彥の鼻曲りや、出齒龜に比ぶれば幾層倍立派だか知れやしまい。色は黑うても淺漬茄子、何うだ一つ妥協をやらうではないか』

小糸姫『ホ、、、、、これ二人の黑ン坊さん、冗談を云ふにも程がある。女ださ思うて無禮な事をなさるさ了見はせぬぞェ』

チャンキー『アハ、、、、見事云ふだけの事は仰有りますワイ。　まさかの時になれば言論よりも實力が勝つ世の中だ。もうかうなつちや此方の自由自在、何事も因緣ぢやさ諦めて我々の要求を全部容れるがお前さんの身の爲だ。可憐さうに、あれ程焦れて居つた友彥を酒を飲まして醉潰し、其間にすつかり路銀を腹に卷き、逃げ出すさ云ふ大それた年にも似合ぬ豪膽者後に殘つた友彥は……僅か肩揚の取れた計りの小娘に三十男が馬鹿にされ、ごうして世間に顏出しがなるものか、「エ、殘念や口惜や、假令千尋の海の底迄も小糸の後を探ねて恨みを云はねば死んでも死ねぬ」……さ恨んだ男の魂が結晶して副守護神さなり我々兩人にすつかり憑依つたのだ、因緣さ云ふものは恐ろしいものだらう。かう申す言葉は決して黑ン坊が云ふのではない、友彥の靈魂が口を藉つて云うて居るのだ。さア返答は如何だ』

さ形相凄じく肩肱を怒らせ汗臭い體で兩方から詰寄せて來る。

小糸姫『ホ、、、、、これ〳〵黒ン坊さん、何ぢやお前は、卑怯千萬な、友彦の靈魂だなぞと……なぜ黒ン坊のチャンキー、モンキーが女王さんに惚れましたと、キッパリ云はぬのだい』

チャンキー『ヤア割こは開けた女王様だ。それも其筈十五やそこらで大きな男を飜弄し故郷を飛び出すやうな阿婆摺れ女だから、其位な度胸は有りさうなものだ。そんなら小糸姫さん、改めて私等二人は、お前さんに心の底から、スキートハートをして居るのだ。餘り憎うもありますまい』

小糸姫『ホ、、、、、あゝさうですかいな。それ程私に御執着ですかな。矢張天下無雙のナイスでせう』

モンキー『ナイスは云はぬでも分つて居る。何うだ、我々兩人の思召を聞いて下さるのか』

小糸姫『妾は聾ぢやありませぬよ。最前から一言も殘らず聞いて居るぢやありませぬか』

チャンキー『そんな聞きやうこは違ひますワイ。要するに、我々の要求を容れて下さるかこ云ふのだ』

小糸姫『アタ阿呆らしい、誰が炭團玉のやうな黒い男に秋波を送りますか、鳥の芝居だこ思つて、最前から、面白可笑しう觀覽して居るのだよ』

チャンキー『これ阿魔女……かう見えても俺は男だぞ。女の癖に、裸一貫の大男を嘲弄するのか』

小糸姫『何程胴殼は大きうても、お前の肝は餘り小さいから、ハハハ乞が矢張小さく見えて仕方がないワ』

モンキー『何處迄も我々を馬鹿にするのだな。よし〳〵、この船を何處へやらうこ俺達の勝手だから、往生する所迄苦しめてやるからさう思へ』

小糸姫『同じ船に乗つた以上は、妾の苦しい時は矢張お前さんも苦しいのだ。妾はかうしてお

客さんだから手を束ねて見て居るが、お前達は勞働せなくては一日も暮れない身分だ。常世の國の果迄なりと勝手に漕いで往つたがよからう。妾は此廣々とした此海面を天國のやうに思うて、假令三年でも十年でも漂うて居るのが好きなのだ』

チャンキー『何と豪膽な女だな。流石は鬼熊別の血の流れを受けた丈あつて、ごこはなしに違つた所があるワイ。なア、モンキー、用心せぬと此奴は化物か知れないぞ。何程膽力がある と云うても十五や十六で之だけ胴の据わる筈がない。三五教の守護を致して居る高倉か旭の化身かも知れない。……オイ一寸兄をあげて見い。尻尾でも下げて居やがりやせぬか』

と小糸姫の背部を一生懸命見詰めながら、

チャンキー『矢張此奴は正眞正銘の小糸姫だ。……オイ、モンキー愈是から不言實行だ』

モンキー『ヨシ合點だ』

とモンキーは前より、チャンキーは後より小糸姫に武者振りつき、手籠にせんと飛び掛るを小糸姫は右に左にぬるり〳〵と身を躱し、暫し揉み合ひ居たりしが、強力なる二人の男に取り押へられ「キャッ」と叫ぶ折しも、四人の乘つた一艘の船、此場に浪を切つて疾走し來り、一人の女は二人の男に當身を喰はした。二人は脆くも船の中にウンと云つたきり大の字になつて倒れて仕舞つた。

小糸姫は思はぬ助け船のために危難を救はれ、一人の女に向ひ、

小糸姫『危い所をお救ひ下さいまして有難う御座います』

と月夜に透かし見て、

小糸姫『貴女は今子姫樣、何うしてまア斯樣な所へ御入來遊ばしました』

と聞かれて今子姫は驚き、

今子姫『さう云ふ貴女は顯恩郷の副棟梁樣のお娘子、小糸姫樣では御座いませぬか。去年の春友彦の宣傳使と手に手をとつて何處へかお越し遊ばし、御兩親のお歎きは一通りでは御座いませぬ。傍の見る目もお氣の毒で耐りませなんだ。さア貴女は一日も早くお歸り遊ばして、御兩親に御安心おさせ遊ばすが宜しからう』

小糸姫『イエ〳〵何うあつても妾は龍宮の一つ島へ參らねばなりませぬ。少し樣子あつて友彦に別れ、今渡海の途中で御座います。顯恩郷の本山は益々隆盛で御座いますか』

今子姫『私は三五教の大神、素盞嗚尊樣の御娘子五十子姫樣の侍女となり、三五教の信者で御座いましたが、鬼雲彦樣や、貴女の御兩親に改心して頂かうと、種々心は碎きましたなれど何うしても駄目、こう〳〵天の太玉命の宣傳使が御入來になり、鬼雲彦初め、御兩親は何處へか身を匿され、顯恩郷は今や三五教の靈場となつて居ります。そして妾は五十子姫樣、梅子姫樣と宣傳の途中、片彦、釘彦等部下の爲に捉へられ、此船に乘せて流されました途中で御座います』

と聞いて小糸姫は大いに驚き、

小糸姫『さすれば貴女は三五教に寢返りを打つた謀反人。鬼雲彦樣を初め、妾の兩親の敵も同樣、サア此上は覺悟をなされ』

と懷劍をスラリと拔いて斬り掛らうとする。五十子姫、梅子姫、宇豆姫は、乘り來し船の上より、騒がず焦らず端然として此光景を打ち看守つて居る。今子姫は言葉淑やかに、

今子姫『マア〳〵お鎭まり遊ばせ。何程貴女がお焦慮なさつても、此通り此方は四人の女貴女は一人、到底駄目ですよ。それよりも貴女の度胸を活用し、龍宮の一つ島へ渡りお道の宣傳を開始なさつたら何うでせう。妾もお力になりまする』

小糸姫は勝敗の數既に決せりと覺悟を極め、

小糸姫『世界は皆神樣のお造り遊ばしたもの、謂はゞ世界の人間は神樣の御子で御座います。神の目から御覽になれば妾も貴女も皆姉妹、今迄の事はスッカリと河へ流しイヤ海に流し相提携して神樣に奉仕しようではありませぬか』

今子姫『それは眞に結構で御座います。……五十子姫樣、梅子姫樣、宇豆姫樣、貴女方の御考へは如何でせう』

三人一度に頷く。

今子姫『アレ彼の通りお三人共、妾と御同感、さア是から御一緒に一つの船で參りませう。併し乍ら二人の男に活を入れ、助けてやらねばなりますまい』

と今子姫は『ウン』と力を籠めて活を入れた。忽ち二人は正氣づき涙を流して謝罪つて居る。

小糸姫『これは〳〵二人の黑ン坊さん、長々御苦勞であつた。妾は是より三五教の宣傳使となつて、世界の隅々迄巡歷するから、お前達はこれで歸つてお呉れ』

と懷中より小判を取り出し投げやれば、二人は押し頂き、

二人『誠に御無禮を致しました上に、之程澤山お金を頂戴いたしまして有り難う御座います。左樣なれば貴女は彼方の船にお乘り下さいませ。私共は此船で錫蘭の港に引返します、萬一友彥樣に遇うたら何う申して置きませうか』

小糸姫『知らないと云うて置くが無難でよからう』

二人は『ハイ有り難う』と感謝し乍ら手早く櫓を操り、東北さして漕ぎ歸る。茲に五人の女は代る〴〵櫓を操りながら、浪のまに〳〵流されて、遂にオーストラリヤの一つ島に無事上陸する事となつた。

（大正一一・六・一四　舊五・一九　加藤明子錄）

瑞　月

わざはひの多きつれなき世にたちて
　樂しみ深きは神のみ子なり
憂き事のしげき世なれど惟神
　神にある身は安けからまし

第四章　一島の女王（七三四）

今迄皎々たる淨玻璃の月は忽ち黑雲に蔽はれ、滿天の星光は瞬く中に雲の帳に包まれた。海面は俄に薄闇く、暴風忽ち臻り、小舟を波のまに〳〵飜弄虐待する。船底に横たはり以前の夢を見て居た小糸姫は驚いて目を瞪り、

小糸姫『ア、大變な恐ろしい夢を見た。……これ船頭さん、俄に闇くなつたぢやないか、此處は一体何と言ふ所だなア？』

チャンキー『あんまり暗くて薩張り見當がこれなくなりました。然し大方ニュージランドの近邊だと思ひます。波は刻々に高くなり、もう此上は風に任して行く處まで行るより仕方がありませぬ。斯う言ふ時にバラモン教のお經を唱へて下さつたら、チットは風も凪ぎませう。

お姫様、何卒神様に願つて下さいな』

小糸姫『此通り風が吹き波が荒く立ち騒ぎ……櫓櫂の方に一生懸命に力を入れて呉れる方が妾に取つて何程安全だか知れませぬよ。最前の夢の様な目に會はされては迷惑だから……』

モンキー『夢に何んな目に會はれましたな？』

と言ひ乍ら一生懸命に櫓を漕いで居る。山岳の如き波の間を、船は木の葉の風に散る如く浮きつ沈みつ、荒波の飜弄に任すより途はなかつた。忽ち巨大なる音響と共に船は一つの岩山に衝突し、泥茶々々になつて仕舞つた。小糸姫は辛うじて壁を立てた如き岩に壁蝨の様に喰ひつき運を天に任し經文を唱へて居る。二人の男は如何なつたか浪の音に遮られ、一聲さへも聞く事が出來なかつた。一時ばかり經つと思ふ頃、空を包みし黑雲は拭ふが如く晴れ、風は凪ぎ、浪靜まり、魚鱗の月光は海上一面に不知火の如く瞬き初めた。斯かる所へ四人の女を乘せた一艘の小舟、島影より悠々と現はれ來り、小糸姫が叫ぶ聲を聞きつけ、中の一人は棹をさし述べ漸うにして小糸姫を船中に救ひ上げた。二人の男の影は目に當らなかつた。小糸姫は疲勞の結果、船底に横たはつたまゝ二時、三時ばかり顔を得上げず、禮をも言はず蟹の如うな泡を吹いて苦しんで居た。

メソポタミヤの顯恩鄕
種々雜多と身を寒し
御言畏み八乙女が
仕へ侍りてバラモンの
國治立の大神の
現はれ出でたる三五の
鬼雲彦が本城に
神素盞嗚大神の
鬼雲彦の側近く
惡逆無道を立直し
至仁至愛の御息より
神の敎に服はせ

名實叶ふ顯恩の　　鄉の昔に復さんと
心を配る折柄に　　天の太玉宣傳使
數多の司を伴ひて　　天恩城に入り來り
言靈戰を開始して　　鬼雲彥の大棟梁
其他の魔神を伊照らせば　　忽ち大蛇と身を變じ
雲を起して遁げ去りぬ　　天の太玉宣傳使
顯恩鄉を掌り　　此處に八人の乙女子は
天地四方の國々に　　三五教の御教を
宣べ傳へんと手を別けて　　荒野を彷徨ふ折柄に
バラモン教の枉神に　　嗅出されて捕へられ

いたいけ盛りの姉妹は　　半破れし釣舟に
投げ入れられて浪の上　　何處を當てと定めなく
漂ひ來る折柄に　　大海中に突き立てる
岩ばかりなる一つ島　　邊に漕ぎ着き眺むれば
何れの人か知らねども　　年端も行かぬ眞娘
岩に喰ひ付き聲限り　　救ひを求めて叫び居る
仁慈無限の五十子姫は　　三人の女子と諸共に
言はず語らず心合ひ　　棹を延ばして救ひあげ
互に櫓櫂を操りつ　　風に送られ西南
龍宮島を指して行く　　あゝ惟神々々

靈の幸を限もなく　世人の上に照らします
至仁至愛の神の御救ひに　小糸の姫は生きかへり
撥ね返りたる心地して　朝日の豐榮昇る頃
漸く頭を擡げける　四邊を見れば四柱の
顯恩郷に見覺えの　娘と見るより仰天し
暫し言葉も無かりしが　漸く心落ち着けて
『あゝ訝かしや〳〵　夢か現か　幻か
五十子の姫や梅子姫　御供の宇豆姫、今子姫
貴女は何故海原に　彷徨ひ來り在しますぞ
是には深き理由の　在するならん詳細に
宣らせ給へ』と手を合せ　胸もごき〳〵問ひかくる。

五十子姫は小糸姫に向ひ、

五十子姫『貴女は顯恩郷の鬼熊別樣のお娘子、如何して、マア斯樣な處へお越しなされましたか。さうして友彦樣は如何遊ばしましたか』

小糸姫『それよりも貴女等四人樣、斯樣な處へ御船に乘つてお越し遊ばすこは合點が參りませぬ。何の御用で何處へ御いでになりますか、お聞かせ下さいませな』

五十子姫『是には深い仔細が御座いまする。何れゆる〳〵聞いて頂きませうが、貴女から何卒先へお口開きを願ひます』

小糸姫は『ハイ』と答へて、顯恩郷を出でしよりその後友彦に別れ、此處迄逃げ來りし一伍一什の顚末を包み隱さず述べ立てた。四人は年にも似合はぬ小糸姫の惡竦にして豪膽なるに舌

を捨いた。

梅子姫『隨分貴女も人格がお變りになりましたね』

小糸姫『さうでせうとも、妾は龍宮の一つ島の未來の女王ですから、今迄の樣な嬢や坊では數多の國人を治める事は出來ませぬ』

と未だ島影さへも見えぬ内から、早くも龍宮島を腹に呑んで居る豪膽不敵の女である。

五十子姫、梅子姫は善惡は兎も角、野蠻未開の地の女王としては最適任ならん、此船に乘つたのを幸ひ龍宮島に到着する幾多の日數を應用して三五教の教理を体得せしめ、精神的天國を建設せしめんと早くも心に定め……嶽恩郷を立ち出で、三五教の教理を四方に宣傳せんとする時しも、バラモン教の片彦、釘彦一派に捕へられ、此海に漂流し來りし事の顚末を細さに物語り、互に敵味方の障壁を除却し、一蓮托生の船の上にて遂に首尾よく小糸姫に三五教の教理を植付けた。

小糸姫は船中より已に女王氣取で五十子姫、梅子姫を顧問か參謀の樣に獨り定めにして什舞つた。今子姫、宇豆姫は自分の小使として待遇して居た。五十子姫、梅子姫は良き機關を得たりと喜び、表面十六才の阿婆摺れ娘の小糸姫を首領と定め、漸くにして五人の女は龍宮島のクスの港に無事到着し、船を岸邊に繫ぎ、五人は宣傳歌を歌ひ乍らさしもに廣き一つ島を足に任せて進み行く。日は漸く沒して四方闇黑に包まれ、五人はとある谷川の邊に簑を敷き安々と寢に就いた。

猛獸の聲は山岳も搖ぐばかり唸り出した。豪膽不敵の五人の女は松風の音か琴の音位に輕く見做し、其聲を就寢の栞とし、他愛も無く此處に一夜を明した。四邊の果實をむしりて腹を拵へ、草茫々と身を沒するばかりの谷道を宣傳歌の聲に木靈を響かせ乍ら、進み〳〵て或る一つ

の平坦なる部落に出た。山と山とに包まれたる摺鉢の底の樣な稍廣き原野と山腹に穴を穿ち、炭燒釜の樣に各戸煙をボウ〳〵と立てゝ居る。五人は原野の中央にある小高き大岩の上に登り聲を限りに天津祝詞を奏上し宣傳歌を歌ひ出した。此聲に驚いてか、山腹の數限りもなき穴より色の黑き老若男女一つの穴より或は五人或は十人、二十人と這ひ出で各柄物を手にし、五人の立てる大岩の周圍に蟻の如く群がり集まつた。此處は一つ島にても稍都會と聞えたる萱野ケ原といふ處であつた。一同は色白き五人の美女が岩上に立てる姿を見て、天津乙女の天上より降り給ひしものと固く信じ隨喜の涙を流し乍ら、四方八方より掌を合せ拜跪敬禮して居る。

斯かる處へ山奥より法螺貝の聲「ブウ〳〵」と響き渡り、見れば數百人の荒男を率ゐた大男騎馬に跨がり、ツカ〳〵と此場に現はれ來り、

大男『ヤア、汝は何れの國より漂着してうせた。此一つ島は、他國人の上陸を許さざる祕密境だ。誰の許可を得て出てうせた。速に其岩を下り一々事情を申し傳へよ』

小糸姫は泰然自若、滿面に笑を湛へて大男の一行を看守つた。四人の宣傳使も同じく兩手を組み合せ、儼然として小糸姫の兩脇に立ち、一同の顏を打ち看守つた。大の男は聲荒らげ、

大男『此方は一つ島の大棟梁ブランジーと言ふ者である。此方の威勢に恐れぬか。一時も早く座を下り我等が縛につけ』

と鬼の如き眼を光らしグツと睨めつけた。小糸姫は莞爾と笑ひ、

小糸姫『愚なりブランジー、妾は天津神の命を受け、只今四柱の從者を率ゐ、五色の雲に乘り此一つ島に天降りしものぞ。此國は妾が治むべき神の定めの眞秀良場なれば今日より妾に誠心を捧げて仕ふるか。さもなくば、天譴を下して槍の雨を降らせ、雷の彈を以て懲戒の爲め汝等を打滅し奥れん。返答如何に』

とキッと言ひ渡せば、流石のブランジーも崇高なる女の姿に首を傾け、暫し思案に暮れて居た。

數百人の荒男は武裝の儘大地に平伏し、五人に向つて萱野ケ原の住民と共に兩手を合せ隨喜の涙に暮れて居る。ブランジーは此光景を見て我を折り、又もや馬を下り大地に平伏して歸順の意を表した。小糸姫は言葉淑やかに、

小糸姫『汝は天津乙女の棚機姫に歸順せし德に依つて、我等が從神となし重く用ひん。飽迄も誠を以て我等に仕へよ』

と巧く言靈を應用すれば一同は感に打たれ、五人の宣傳使を神と敬ひ、前後を護りて稍展開せる美はしき原野の中の都會に導き、廣殿に五人を迎へて心よりの馳走を拵へ、いと懇に誠意を表した。

茲に五人は一つ島の花と謳はれ、三五の神の敎を四方に宣傳し、其驍名は全島に轟き渡ることゝなつた。此處を是より地恩鄕と命名した。小糸姫は遂に島人に擧げられて女王となり黃龍姫と改名する事となつた。

茲に五十子姫は今子姫を從へ、梅子姫、宇豆姫を小糸姫が左右に侍せしめ、自轉倒島さして神素盞嗚大神の御跡を慕ひ進み渡る事となつた。ブランジーの妻にクロンバーといふ女があつた。夫婦何れも五十の坂を四つ五つ越えた年輩である。ブランジーはクロンバーと共に今は黃龍姫の宰相役となり、遠近に其名を轟かして居た。クロンバーは或時黃龍姫に拜謁を乞ひ奧の間近く進み入り、

クロンバー『黃龍姫樣に折入つてお願ひが御座います。妾の夫ブランジーは貴女樣のお見出しに預り、宰相として恩寵を辱なうし、此島に於ては飛ぶ鳥も落す勢となりました。クロンバー身にとり有難く御禮の申し上げ樣も御座いませぬ。御存じの通り大男の不束者で

御座いますれば、何卒御見捨てなく末永く使つてやつて下さいませ。妾は實は此島の生れではなく、聖地エルサレムに仕へて居りました者で御座いますが、大切なる玉の紛失せし爲め其所在を探ねんと、龍宮の乙姫樣の生宮として今年で殆ど滿二年、殘る隈なく探せども今に所在は分らず、何卒々々貴女の天眼力を以て御示し下さらば有り難う御座います』

黄龍姫『是は珍らしき汝の願ひ、其玉と申すは如何なる玉なるぞ』

クロンバー『ハイ、左樣で御座います。金剛不壞の如意寶珠に黄金の玉、紫の玉の三つの御寶で御座います。今迄は自轉倒島の三五教の東本山に納めありし處、何者にか盗み取られ今に行衛が分りませぬ。黄金の玉は妾が保管致して居りました所、何者にか盗み出され、又殘り二つの玉は嵊に聞けば是亦行衛不明との事、何卒貴女の御神力を以て、此島の何れの地點にあるやお示し下さらば有り難う存じます』

黄龍姫はさも鷹揚さうに微笑み乍ら、

黄龍姫『其寶玉は此龍宮島には隱しては無い。自轉倒島の或地點に隱しあり、容易に發掘すべからず、最早汝は玉に對する執着心を離れ、ブランジーと共に誠心を盡して國務に奉仕したが宜からう』

と言ひ捨て逃ぐるが如く奥殿に姿を隱して仕舞つた。後にクロンバーは獨言、

クロンバー『アーア、仕方がない。黄金の玉を紛失し、高姫樣に叱り飛ばされ、守護神の囁きに依つて龍宮の一つ島に隱しあると聞き、此處まで探ねて來たものゝ、此廣き島に三年や五年國人を使うて探して見た處で雲を摑む樣な咄し、黄龍姫樣のお言葉に依れば三つの寶は此島には無いとの事、如何したら宜からうか。彼の玉無き時は如何しても聖地に歸り高姫樣に會はす顏がない。此黑姫は夫高山彦と共にブランジー、クロンバーと外國樣に名を變へ

て此島に居るものゝ、もう斯うなつては何程結構な役を仰せ付けられても聖地に比ぶれば物の數でも無い。ア、早く歸り度いものだ』

と語る折しもブランジーは此場に現はれ、

ブランジー『ヤア黒姫、早く舘へ歸らうぢやないか。黄龍姫様の御機嫌を損ねてはならないぞ』

クロンバー『高山さん、何を仰有る、もう妾は此島が嫌になりました。何程探したとて此廣い島に手掛りの出來る筈がありませぬ。此上は破れかぶれ、一旦聖地へ立ち歸り、三五教を根本より立直し、言依別の教主を追つ放り出さねば虫が得心致しませぬ。我々夫婦が波濤萬里の此島へ來て苦勞するのも、皆言依別のためではありませぬか、エ、殘念や、口惜や、妾はもう破れかぶれ、是から狂亂になりますから其積りで居て下さい』

ブランジー『ハ、、、、、又何時もの癇癪病が突發したのか。マア〳〵宅へ歸つて、酒でもゆつくり飲んで其上の事にしようかい』

と背を三つ四つ打ち、クロンバーの手を引いて己が舘へ歸り行く。

（大正一一・六・一四　舊五・一九　北村隆光録）

瑞月

人の身の春に會ひたる若さかりを
つとめはげみて善の種まけ
神にある今日のわが身は若き日の
おもひつきせぬ惱みのたまもの

あれば憂くなければつらし人の世は
　神のまに〳〵進むこそよし
現身の世に生くる身は憂しつらし
　生命の神にたよるのみなる
世をなげくばかりが國の爲ならず
　あらん限りの力盡さむ

第二篇　南洋探島

第五章　蘇鐵の森（七三五）

生命の綱と賴みてし
執念深く何處までも
夜叉の如くに狂ひ立ち
浪の淡路の島影に
九死一生の大難を
感謝するかと思ひきや
自尊の惡魔に遮られ
罵り嘲り東助が

三つの神寶の所在をば
探さにや置かぬと高姫が
積る思ひの明石潟
船打ち當てゝ沈沒し
玉能の姫に助けられ
心の奥に潜むなる
生命の親をさまゝに
操る船に身を任せ

玉の所在は家島ぞと
心を焦ちて到着し
イロ〳〵雑多と身を盡し
心碎きし其揚句
絶望の淵に身を沈め
如何はせんと こつおいつ
思案に暮るゝ折柄に
濱邊に繫げる新調の
小舟に身をば任せつつ
貫州從へ玉の緒の
生命の瀬戸の海面を
力限りに漕ぎ出し
小豆ケ島へ漂着し
又もや玉の所在をば
探らんものと國城の
山を目蒐けて駈登り
岩窟の中にてバラモンの
神の司の蜈蚣姫
舘に思はず迷ひ込み
早速の頓智高姫は

蜈蚣の姫が心汲み
表面ばかり親善の
姿装ひ漸うに
敵の毒手を逃れつゝ
蜈蚣の姫を利用して
玉の所在を探らんと
再び船に身を任せ
一行數人波の上
馬關海峡打過ぎり
西へ南へ進み行く
蜈蚣の姫は第一に
玉の所在を索めつゝ
戀しき娘の所在をば
探らん爲の二つ玉
愛と慾とに搦まれて
スマートボール其外の
供を從へ高姫が
船に棹さし進み行く
心そぐはぬ敵味方
さしもに廣き海原の

波は風げごも村肝の　心の海に立つ波は
穏かならぬ風情なり。

焦つく様な暑い日光を浴びた一行は、汗を瀧の如くに搾り出し、渇を感じ水を需めんと、やうくにして海中に泛べる大島の磯端に船を横たへ、彼方此方と淡水を求めつゝ草木を別けて互に『オーイオイ』と聲を掛け、連絡を保ち乍ら、島内深く進み入つた。渇き切つたる喉よりは最早皺嗄れ聲も出なくなつて了つた。

高姫は漸くにして蘇鐵の森に着いた。一丈許りの蘇鐵の幹は大蛇の突立つて雨傘を擴げた如く、所狭き迄立並ぶ。蘇鐵のマラを眺めて矢庭に貫州に命じ、むしり取らしめてしがみ始めた何とも知れぬ甘露の如き甘き汁、嚙むに從つて滲み出で、漸く蘇生の思ひをした。……蜈蚣姫一行も漸くにして此場に現はれ、高姫がむしり取つたるマラに目を注ぎ渇を醫する爲に、餓鬼の如く喰ひ付かんとする一刹那、マラの實は忽ち延長し一丈許りの大蜈蚣となつてノロ〳〵と這ひ出し、其の儘蘇鐵の幹にのぼり、次から次へと條虫の如く延長して蘇鐵の幹を殘らず卷き、一指をも添へざらしめんとした。蜈蚣は長さと太さを時々刻々に增し、一時程の間に此大島全体を卷き盡した。

高姫、蜈蚣姫其他の一行は、樹木と共に蜈蚣に包まれ、息も絶え〳〵に天津祝詞を奏上し、バラモン教の經文を唱へ、只管身の安全を祈る事のみに餘念なかつた。

マラの變化より成出でたる蜈蚣は、大島を十重二十重に卷き、四面暗澹として暗く、得も言はれぬ不快の空氣に、呼吸器の働きも停止せん許りとなつた。九死一生の破目に陷りたる高姫は、最早是までなりと總ての執着心に離れ、運命を惟神に任せ、觀念の眼を閉ぢ死を待ちつゝあつた。

忽ち頭上より熱湯を浴びせかけた如き焦頭爛額の苦みを感ずると共に、紫磨黄金の肌を露はしたる巨大の神人、忽然として此場に現はれ來り、

神人『汝日の出神の生宮と稱する高姫、今茲に悔い改めずば汝は永遠に今の苦みを味はひ、根底の國の消えぬ火に燒るべし』

と云つた儘姿を消した。一方蜈蚣姫は、頭上より氷の刃を以て突き刺されし如き大苦痛を感じ七轉八倒身を蹠く折しも、墨の如き黑き巨顏を現はし、眼球は紅の如く輝きたる異樣の怪物、首から上許りを暗黑の中にも殊更黑き輪廓を現はし乍ら、長き舌を出して蜈蚣姫の頭部面部を舐めた其恐ろしさ、流石氣丈の蜈蚣姫も其厭らしさに身の毛もよだち、何の應答も泣く許り、怪物の舌の先よりは無數の小さき蜈蚣、雨の如くに現はれ來り、蜈蚣姫の身体を空地もなく包み所構はず無數の鋭き舌劍を以て咬みつける其苦しさ『キャッ』と叫んで其場に倒れ、右に左に轉げ廻る。此時高姫は漸く正氣に復し四邊を見れば、酷熱の太陽は晃々と輝き亘り、數多の樹木青々として、吹き來る海風に無心の舞踏をやつてゐる。

高姫『ア、夢であつたか。それにしても此怪しき蘇鐵、斯かる怪異の續出する島に長居は恐れ一時も早く此島を離れ、寶の所在を探らん。貫州來れッ』

と四邊を見れば、貫州はドッカと坐し、冥目した儘腕を組み、石像の如くに固まつて居る。高姫は一生懸命に祝詞を奏上し、頰を抓り、鼻を摘み、イロ〳〵介抱をすること半時ばかりを費した。されど貫州は血の氣い通はざる石像の樣に、何處を撫でても少しの温か味も無くなつて居る。高姫は何となく寂しさに襲はれ、泣き聲まぜりになつて、

高姫『コレ貫州、今お前に斯んな所で死なれて、どうなるものか、……チット確かりしてお呉れ』

と泣き口説く。貫州は漸くにして左の目をパッチリ開けた。されど黒球はどこへか隠れ、白眼計り剝き出し、木の根の様な筋に赤き血を漲らし、赤き珊瑚樹の枝の様に顔面が見えて居る。

高姫は一生懸命に祈願を凝らす。此時今迄大地に打つ倒れて居た蜈蚣姫は無言の儘ムク〳〵と立上り、高姫の前にヌッと現はれ、怒り形相凄じく、拳を固め、平家蟹の様な面をさらして睨付け出した。又もやスマートボールむく〳〵と立上り、白玉計りの兩眼を剝き出し、口を尖らせ、蟷螂の様な手附をし乍ら、鶴嘴を以て土方が大地を掘る様に、高姫の頭上目蒐けてコッン〳〵と機械的に打ち始めた。其手は鐵の如く固くなつて居る。高姫は此鋭鋩を避くる爲、身をかはさんと焦れども、土中より生えたる木の如く、一寸も身動きならず、止むを得ず同じ箇所を幾回となく、拳の鶴嘴につゝかれて居るより仕方がなかつた。

此時天上の雲を押し開き、天馬に跨り此方に向つて下り來る勇壯なる神人があつた。數百人の騎馬の從卒を伴ひ、鈴の音シャン〳〵と一歩々々空中を下り來り大音聲にて、

神人『汝は高姫ならずや。日の出神と自稱する汝が守護神は、常世の國のロッキー山に發生したる銀毛八尾の惡狐なるぞ。只今汝が靈縛を解かん。今日限り悔い改め、假りにも日の出神なごゝ名乘る可らず。我こそは眞正の日の出神なり。一先づ此場は神直日大直日に見直し聞き直し、汝が罪を赦すべし。是れより汝は蜈蚣姫の一行と共に南洋に渡り、龍宮の一つ島に到りて、黒姫を救へ。ゆめ〳〵疑ふな』

と云ひ棄てゝ馬首を轉じ、數多の從神と共に、轡を並べて天上高く昇らせ玉うた。此時何處ともなく空中より大なる光玉現はれ來り、高姫が面前に轟然たる響と共に落下し、火は四邊に爆發飛散し、高姫一行の身は粉碎せしかと思ふ途端に目を醒せば、大藍鐵の下にマラをしがみながら倒れて居た蜈蚣姫其他一同は、炎天の草の上に頭の巨大なる虹蟲なごに、或は刺され、或

は舐められ乍ら、息も絶え〳〵に倒れて居た。貫州はこ見れば、そこらに影もない。高姫は力限りに、

高姫『オイ、オーイ、貫州々々』

こ叫び始めた。あたりの森林の雜草を踏み分けて、大なる瓢箪に水を盛り、ニコ〳〵こして此處に現はれ來る男の姿を見れば、擬ふ方なき貫州である。

貫州『高姫樣、お氣が附きましたか。サア此水をおあがり下さいませ』

こ自ら手に掬うて高姫に啣ませた。高姫は初めて心神爽快を覺え、

高姫『ア、持つべき者は家來なりけり、お前がなかつたら妾は如何なつたか分らない。就ては幸ひ蜈蚣姫其他の連中は此通り昏倒つて居れば、今の間にお前こ二人、あの船に乘つて龍宮島へ渡り、玉の所在を探さうぢやないか』

こ云ひ乍ら稍首を傾げ笑みを湛へて貫州の顏を覗き込み、貫州の返辭をもどかしげに待ちわびた。

貫州『それだから貴女は不可ないのです。假令敵でも味方でも助くるのが神の道、此島へ斯の如く弱り切つた人々を殘し、我々兩人が船を操り逃げ歸るなごゝ、左樣な殘酷な事がごうして出來ませうか。貴女はまだ改心が出來て居ないのですなア』

高姫『大功は細瑾を顧みず、天下國家の爲には少々の犧牲を拂はなければならぬぢやないか。お前はそれだから困るのだ。まるで女の腐つた樣な氣の弱い男だから……サア貫州、妾に從いておいで、是れから二人が出世の仕放題、こんな奴を連れて行かうものなら足手纏ひになるばかりか、大變な邪魔者だ。サア行かう』

こ元氣恢復したのを幸ひに、夢の裡の日の出神の訓戒を忘れ、功名心に驅られスタ〳〵こ先に

立ちて磯邊に進まうとする。貫州は高姫の顏を心無げに見遣り乍ら、耳に入らざるものゝ如く裝ひ、瓢箪の清水を蜈蚣姫の口に啣ませた。蜈蚣姫は初めて生きたる心地し乍ら起きあがり、兩手を合せて貫州に感謝の意を表する。貫州は是れに力を得てスマートボールを初め、其他一同に水を與へた。高姫は此態を見て目を釣り上げ、面をふくらせ眺めて居る。蜈蚣姫は立あがり、

蜈蚣姫『高姫樣の御指圖に依つて、貫州樣は厭々乍ら、主人の命だと思ひ、私達に結構な水をドツサリ與へて元氣を恢復させて下さいました。お蔭で私の身内の者も皆助かりました。主人の心下僕知らずとやら、仁慈無限の高姫樣の大御心に反抗する貫州さんは、餘程可愛い人です。貴女等主從の御爭論を、妾は一伍一什聞かして頂きました。……高姫樣、御親切有難う御座います。此御恩はキツトお返し申します。オホ、、、』

と肩を搖り、厭らしさうに笑ふ。スマートボールは立あがり、

スマートボール『コリヤ貫州、……貴樣は餘程腹の惡い奴ぢや……無いワイ。よう俺を助けて呉れやがつた。キツト御禮を申すから、さう思うて居れ。……モシ高姫さん、貴女は三五教に反旗を揭げて、ウラナイ教を創立なさつた樣な日の出神の僞宮だから、流石は仁慈に富み、申分の無い善人ぢや……無い。よう我々を助けてやらうと思ひくさらなんだ。アツク〳〵御禮申しますぞ』

高姫『オツホ、、、、皆さんの態のよい當てこすりワイの。こりや決して高姫の精神から言つたのぢやない。蜈蚣姫樣やお前達の守護神が高姫の体内を藉つて言つたのだ。高姫の守護神は臨時貫州に憑つたのだよ。それだから昔の根本の身魂の因緣が分らぬと、善が惡に見えたり、惡が善に見えたり致しますぞや、神樣のイロ〳〵として心をお引き遊ばす引つか

け戻しのお仕組だから、人が悪に見えたら、自分の心を省みて改心なされ。人の悪いのは皆我が悪いのだ。此高姫は水晶玉の世界の鑑、皆の心の姿が映るのだから、キット取違ひをしては可けませぬぞや。アーア蜈蚣姫様も餘程身魂の研けたお方ぢやと思うたが、日の出神の生宮の前に出て來ると、まだ〳〵完全な所へは往けませぬワイ』

蜈蚣姫『オホ、、、』

一同『アハ、、、』

貫州『何が何だか、サッパリ見當が取れなくなつて來たワイ』

高姫『きまつた事だよ。見當の取れぬお仕組と、幾性男子が仰有つたぢやないか。此事分りて居る者は世界に一人よりない……こお筆に現はれて居るだらう。お前達に誠の仕組が分りたら、途中に邪魔が這入りて、物事成就致さぬぞよ。オホ、、、』

と大きう肩を搖つて雄叫びする。蜈蚣姫は眉毛にそつと唾をつけて素知らぬ顏……

蜈蚣姫『モシ高姫さん、貴女は大自在天様の御眷族の生宮だと仰有るかと思へば、日の出神の生宮とも仰有る樣だし、實際の事は何方の守護神がお懸りなのですか』

高姫『變幻出沒千變萬化、自由自在の活動を遊ばす大自在天樣の御守護神だから、時あつて日の出神と現はれ、又大國別命の眷族……實際の所は大黑主命の御守護が主なるものです』

蜈蚣姫『日の出と大クロと……大變な懸隔ですなア。善惡の區別が全く裏表の樣に思へますワ』

高姫『お前さんにも似合はぬ愚問を發する方ですなア。顯幽一致、善惡不二、裏があれば表があり、表が有れば裏がある。表裏反覆常なき微妙の大活動を遊ばすのが眞の神樣ぢや。馬

車馬的の行動を取る神は、畢竟人を指揮する資格の無いもの、我々は大黒主命の生宮たる以上は、すべての神々を、大自在天樣に代つて、指揮命令する特權を惟神に具備して居る。所謂日の出神の岩戸開きの生宮で御座る。神はイロ〳〵として心を曳くから引掛戻しに懸らぬ樣に御用心をなされませ』

蜈蚣姫『何時の間にやら、貴女も顯恩城の信者に化け込んで居られた時とは、口車が餘程運轉する樣になりましたなア』

高姫『化け込んだとはソラ何を仰有る。誠正直生粹の日本魂で大自在天樣を信仰して居りました。ウラナイ教と謂つても、三五教と言つてもバラモンでもジアンナイ教でも、元は一株、天地根本の大神樣に變りはない。併し乍ら今日の所ではお前さんの奉ずるバラモン教の行方が一番峻酷で、不言實行で、荒行をなさるのが御神慮に叶ふと思つたから、國城山でお目に掛つてより、屆一屆バラモンが好になつたのですよ。サア〳〵斯うなれば姉妹も同樣、一時も早く玉の所在を探しに參りませう』

蜈蚣姫『私は最早玉なんかに執着心はありませぬ。それよりも心の玉を研くのが肝腎だと氣がつきました』

高姫『ホ、、、、、重寶なお口だこと。天にも地にも唯一人の小糸姫樣の所在が分りかけたものだから、玉所の騒ぎではない。一刻も早く小糸姫さんに遇ひたいと云ふのが貴女の一念らしい。それは無理もありませぬ。何と云つても目の中へ這入つても痛くない一人娘の事だから、國家興亡よりも自分の娘が大切なのは、そりや人情ですワ』

と嘲る樣に云ふ。蜈蚣姫は高姫の言葉にムッとしたが、何を云うても唯一艘の船、高姫の機嫌を取らねば目的地へ達する事が出來ないと思つて、ワザと機嫌よげに、

蜈蚣姫『ホ、、、、、これは〳〵高姫さんの御教訓、感じ入りました。つい我子の愛に溺れ、大事を誤りました私の不覺、はしたない女こお笑ひ下さいますな。そんなら此れより神第一、我子第二こ致しませう』

高姫『第三に玉ですか、あなたのお説の通り、そこまで研けた以上は、有形的の玉よりも、貴女は小糸姫様に會ひさへすれば結構なんでせう。モウ玉なんかに執着心を持たぬ様になされませ。其代りに妾は其玉を發見次第御預り致し、妾の手より大自在天様に御渡し申しませう宜しいか。一旦貴女のお口から出たこと、吐いた唾液を呑み込む譯にもいきますまい』

こ目を据ゑて蜈蚣姫の顏を一寸見る。蜈蚣姫はワザこに顏を背け、何喰はぬ顏にて、

蜈蚣姫『何事も貴女に任せませう』

スマート『モシ〳〵蜈蚣姫様、そりや目的が違ひませう。貴女も魔谷ケ岳に永らく御苦勞なさつたのも、玉の所在を探さん爲でせう。何こ云ふ氣の弱い事を仰有るのだ。假令高姫さんが何こ仰有つても、私が承知しませぬぞ』

蜈蚣姫『何事も私の胸に有るのだから默つて居なさい』

高姫『胸に有るこは何があるのですか。餘程陰險な事を仰有るぢやありませぬか。さうすること今妾に仰有つた事は詐りでせう』

蜈蚣姫『假にも神様に仕へる妾、鬼熊別の女房、ごうして嘘僞りを言ひませう。あんまり輕蔑なさるこ、此蜈蚣姫だつて此儘には置きませぬぞ』

こ肩を怒らし口をへの字に結んで齒ぎしりし乍ら、形相凄じく高姫の顏を睨みつけた。

高姫『ホ、、、、、平家蟹が陀羅助を喰つた様なお顏をなされますな。貴女もヤッパリ腹が立ちますか。忍耐こ云ふ寶を如何なさいました』

蜈蚣姫『それは貴女のお見違ひ、妾は腹が俄に痛くなつて苦しみ悶えた結果、顔付が怖くなつたのです。ア、お蔭樣で大分に緩んで來ました。サア〳〵皆さん、仲ようして一つの船でこの荒波を渡りませう。十分お水の用意をして……』

各自に器の有り丈を引抱へ、檳榔樹の生え茂る林の中を潜り、貫州に導かれて、谷間の水溜りを求め、辛うじて水を充たせ、漸く船に積み込み、月明の夜を幸ひ、折からの順風に帆を上げ西南に舵を取り、海上に起伏する小島を縫うて進み行く。

（大正一一・七・二　舊閏五・八　松村眞澄錄）

第六章　アンボイナ島（七三六）

高姫、蜈蚣姫を乘せたる船は、波のまに〳〵大小無數の嶋嶼を右に左に潜りつゝ進み行く。俄に包む濃霧に咫尺を辨ぜず、此儘航海を續けんか、何時船を岩石に衝き當て破壞沈没の厄に會ふも知れざる破目になつて來た。流石の兩婆アも船中の一同もはたゞ當惑し、何となく寂寥の氣に充たされ、臍の邊りより喉元さして舞ひ上る熱き凝固は、螺旋狀を爲して体内を搔き亂すが如く、頭部は警鐘亂打の聲聞え、天變地妖身の置き處も知らぬ思ひに惱まされた。何となく嫌らしき物音、鬼哭啾々として肌に粟を生じ心膽糸の如く細り、此上少しの風にも、玉の緒の糸の斷絶せん許りになつて來た。何處ともなく嫌らしき聲、頭上に響き渡つた。

『ア、、飽迄我を立て徹す高姫、蜈蚣姫の兩人、天の八衢彦命の言葉を耳を浚へてよつ

く聞け。汝は悪が未だ足らぬ。悪ならば悪でよいから徹底的の大悪になれ。大悪は卽ち大善だ。汝の如き善悪混淆、反覆表裏常なき改慢心の大化物、是こそ眞の悪であるぞよ。悪こそ云ふ事は萬事萬端、神界の爲めに埒があく働きを言ふのだ。

イ、、嫌らしい聲を聞かされて慄ひ上り、意氣銷沈の意氣地無し。今此處で慣用手段の日の出神を何故現さぬか。大黑王命は如何したのだ。因循姑息、悪魔の我言に唯々諾々として畏服致すイカサマ宣傳使。てもいげち無い可憐らしい者だなア』

高姫『何れの神樣か存じませぬが、

ア、、悪をやるなら大悪をせいこはチット聞えませぬ。善一筋の日本魂の生粹を立て貫く此高姫。

イ、、いつかな〳〵、變性女子的貴女の言葉には贊成出來ませぬ。なア蜈蚣姫さん、お前さんもチット、アフンとしていぢけて居らずに、ア、、イ、、アイ共に力を協せ、相槌を打つたら如何だい。斯んな時こそ誠の神の御神力を現はさいで何時現はすのだ、ア、、、イ、、意氣地の無い人だなア』

空中より怪しき聲、

『ウ、、、煩さい代物だ。何處までも粘着性の强い高姫の執着、有爲轉變の世の中、今に逆とんぼりを打たねばならぬぞよ。言依別の敎主に反抗致した酬い、眼は眩み波にさられた沖の船、何處にとりつく島もなく、九死一生の此の場合に立ち到つて、まだ改心が出來ぬか。

エ、、偉相に我程の者なき樣に申して世界中を跨にかけ法螺を吹き捲り、誠の人間を迷はす曲津神の張本人、鼻ばかりの高姫が今日は斷末魔、扨てもノ〳〵可憐相な者だ。浮世に望

みはないと口辯の樣に申し乍ら、其實、浮世に執着心最も深く、偉相に肩臂怒らし大聲で嚇す夏の雷鳴婆ア……。

オ、、鬼ども蛇ども惡魔ども知れぬ性來に成りきりて居りても未だ氣がつかぬか。恐ろしい執着心の鬼が角を生して其方の後を追つ掛け來り、今此處で往生させる大神の御經綸、尾を捲いて改心するのは今であらう。返答は如何だ』

高姫『ウ、、煩さい事を仰有るな。

エ、、えたいの知れぬ聲を出して。

オ、、嚇さうと思つても日の出神の生宮はいつかな〳〵、そんなチョッコイ事に往生は致しませぬぞ。一つ島の女王と聞えたる黄龍姫を、お產み遊ばした蜈蚣姫の姉妹分とも言はれたる此高姫、何れの神か曲津か知らねども、チットは物の分別を辨へたが宜からうぞ』

空中より、

『カ、、重ねて言ふな、聞く耳持たぬ。蛙の行列向ふ見ず、此先には山岳の如き巨大な蛙が現はれて、奸智に長けたる汝が身も魂も、只一口に嚙み碎き亡ぼして呉れる仕組がしてあるぞ。叶はん時の神頼みと言つても、モウ斯うなつては駄目だ。神は聞きは致さぬから左樣心得たが宜からう。

キ、、危機一髪、機略縱横の高姫も最早手の下し樣もあるまい。氣違ひじみた氣焰を吐いた其酬い、氣の毒なものだ。聞かねば聞く樣にして聞かすと申すのは此事であるぞよ。

ク、、黑姫と腹を合せ、變性男子の系統を眞向に振り翳し、神界の經綸を無茶苦茶に致した曲者、苦勞の凝りの花が咲くと何時も申して居るが、神の道を碎く苦勞の凝りの花は今愈咲きかけた。

ケ、、見當のこれぬ仕組だと申して遁辭を設け、誤魔化して來た其酬い。
コ、、堪へ袋の緒がきれかけたぞよ。聖地の神々を困らしぬいた狡猾至極の汝高姫、我こ
我心にこうて見よ。心一つの持ち樣で善にも惡にもなるぞよ。
サ、、探女醜女の兩人、よくも揃うたものだ。サア是からは蜈蚣姫の番だ。逆樣事ばかり
ふれ廻り天下萬民を苦しめた蜈蚣姫の一派。
シ、、黒案をして見よ。神の申す言葉に少しの無理もないぞよ。皺苦茶婆アになつてから
娑婆に執着心を發揮し、死後の安住所を忘れ、獅子奮迅の勢を以て種々雜多の惡計を廻
らし乍ら、至善至美至眞の行動と誤解する痴者。
ス、、少しは胸に手を當てゝ見よ。素盞嗚大神の御精神を諒解せぬ間は、何程汝が焦慮る
とも九分九厘で物事成就は致さぬぞよ。

セ、、背中に腹が代へられぬ樣な此場の仕儀、それでも未だ改心が出來ぬか。雪隱虫の高
上り、世間知らずの大馬鹿者。
ソ、、其方達二人が改心致さぬと、總ての者が總損ひになつて、まだ〳〵大騷動が起るぞ
よ。早々改心の實を示せ。そうでなければ今此處でソグリ立てゝやらうか』
蜈蚣姫『ソ、、それは、マア一寸待つて下さい。それ程妾の考へが違つて居ますか。此蜈蚣姫
は明けても暮れても、神樣の爲め、世界の爲め、人民を助ける爲めに、苦勞艱難を致して
居る善の鑑と堅く信じて居ります。それが妾の生命だ。何れの神か惡魔か知らねども、我
々の心が分らぬとは實に殘念至極だ。粗忽しい觀察をせずに、もうチット眞面目に我々の
腹の底を調べて下さい』
空中より、

『タヽ、叩くな〳〵、腹の中をタヽ、斷ち割つて調べてやらうか。高姫も同樣だぞ、汝の腹の中は千里奥山古狸の棲處となつて居る。日の出神と名乘る奴は銀毛八尾の古狐の眷族だ。大黑主と名乘る奴は三千年の劫を經たる白毛の古狸だ。又蜈蚣姫の腹中に潛む魔神はアダム、エバの惡靈の裔なる大蛇の守護神だ。

チヽ、違ふと思ふなら、今此處で正体を現はさうか。地の高天原を蹂躙せんと、汝等兩人の体内を借つて仕組んで居るのだ。汝はそれも知らずに誠一つと思ひつめ、自分の身魂に自惚し、最善と感じつゝ最惡の行動を敢へてする、天下の曲津神となつて居るのに氣がつかぬか。

ツヽ、つまらぬ妨げを致すより、月の大神の心になり、心の底より悔悟して。

テヽ、天地の神にお詫を致せ。

トヽ、トンボ返りを打たぬうち、トツクリと思案を致し、トコトン身魂の洗濯を勵むが肝腎だぞよ。

ナヽ、何と申しても其方等は曲津の容器。彌勒神政の太柱は地の高天原に、神世の昔より定められた身魂が儼然として現はれ給ふ。何程其方が焦慮つても、もう駄目だ。

ニヽ、二階から目藥をさす樣な賴りの無い法螺を吹き廻るより、生れ赤子の心になつて言依別の教主の仰せを守れ。

ヌヽ、ヌーボー式の言依別だと何時も惡口を申すが、其方こそは言依別の神德を横奪せんとする、ヌースー式の張本人だ。

ネヽ、熱心な信者を誤魔化し、蛇が蛙を狙ふ樣に熱烈なる破壞運動を致す佞人輩。

ノヽ、野天狗、野狐、野狸の樣な野太い代物。喉から血を吐きもつて、折角作り上げた誠

の魂を攪亂致す野太い代物。下らぬ望みを起すよりも良い加減に往生致したら如何だ』

高姫『もう〳〵十分です。

ハ、、ハラ〳〵します。腹が立つて齒がガチ〳〵しだした。早くしようも無い事は、もうきりあげて下さい。

ヒ、、日の出神の生宮が堪忍袋の緒を切らしたら、何程偉い神でも堪りませぬぞ。

フ、、不都合千萬な、此方の行動を非難するとは何れの神だ。

ヘ、、屁でも無い理窟を並べて閉口させうと思うても……ヘン……此高姫さんは一寸お手には合ひませぬワイ。

ホ、、ほんに譯の分らぬ廻しものだ。斯んな海の中へ我々を引張り出し、一寸先も見えぬ樣な濃霧に包んで置いて、暗がりに鷄の頸を捻ぢる樣な卑怯な計略、其手は喰はぬぞ。

マ、、曲津の張本。

ミ、、身の程知らずの盲目神。

ム、、蜈蚣姫と高姫が。

メ、、各自に神力のあらん限りを發揮して。

モ、、耄碌神の其方を脆くも退治して見せよう。

ヤ、、八岐大蛇だの、狐だの、狸だのとは何たる暴言ぞ。

イ、、意地氣根の惡い。

ユ、、油斷のならぬ胡散な痴呆もの。

エ、、えー邪魔臭い。

ヨ、、よくも、ヨタリスクを並べよつたな、ようも惡魔の變化奴。

ラ、、亂臣賊子、サア正体を現はせ、勇氣凛々たる日の出神の生宮、大自在天の太柱、グヅ〳〵吐すこ貴樣の素首を引き拔いてラリルレロゴトンボリ返しを打たしてやらうか』

空中より一層大きな聲で、

『ワ、、笑はせやがるワイ。我身知らずの馬鹿者共、手のつけ樣のない困つた代物だ。

キ、、何程言うても合點の往かぬ歪み根性の高姫、蜈蚣姫。

ウ、、煩さくなつて來たワイ。艮の金神國治立尊の御前に我は是より奏上せん。

エ、、襟を正して謹聽して待つて居らう。やがて御沙汰が下るであらう。

ヲ、、臆病風に誘はれてヲド〳〵し乍ら、まだ。

ガ、、我の强い。

ギ、、ぎり〳〵になる迄。

グ、、愚圖々々致して居るこ。

ゲ、、現界は愚か。

ゴ、、後生の爲めに成らないぞ。

ザ、、態さらされて。

ジ、、ジタバタするよりも。

ズ、、圖々しい態度を改め。

ゼ、、前非を悔い改心致して。

ゾ、、造次にも顚沛にもお詫を致せ。

ダ、、騙し歩いた。

ヂ、、自身の罪を。

ヅ、、津々浦々まで白狀致して廻り、王に對する執着心を只今限り綺麗薩張此海に流して仕舞へ。さうして仕舞へば又神の道に使つてやるまいものでもない。

デ、、デン〳〵虫の角突き合ひの樣な小さな喧嘩を致し。

ド、、如何してそんな事で神界の御用が勤まると思ふか。

バ、、婆の辯に馬鹿な眞似を致すと終には糞垂れるぞよ。

ビ、、貧乏搖ぎもならぬ樣になりてから。

ブ、、ブッ〳〵と水の中に屁を放いた樣な小言を申しても。

ベ、、辯舌を何程巧に致しても。

ボ、、木瓜の花だ、誰も相手になる者はないぞよ。

パ、、パチクリと目を白黑致して。

ピ、、ピン〳〵跳ねても、キリ〳〵舞ひを致しても。

プ、、プンと放いた屁ほどの効力も無いぞよ。

ペ、、ペン〳〵跳ねても。

ポ、、ポン〳〵言つても、もう日の出神も通用致さぬから覺悟をしたが宜からう。汝果して日の出神ならば、此濃霧を霽らし、天日の光を自ら浴びて船の方向を定め、アンボイナの聖地に渡れ。其時又結構な敎訓を授けてやらう』

高姫、蜈蚣姫は返す言葉も無く、船の中に兩手を合せ、負けぬ氣の鬼に妨げられて謝罪り言葉も出さず、俯向いて謝罪と片意地との中間的態度を執つて居た。何時しか濃霧は霽れた。よく〳〵見れば船は何時の間にやら南洋一の聖地、龍宮島と聞えたるアンボイナの港に横着けになつて居た。

（大正一一・七・二　舊閏五・八　北村隆光錄）

瑞　月

昔もなく靜に積る白雪の
　清きは神の心なりけり
世の中のすべてのものは神の子よ
　生ひ立ち行くを祈るばかりぞ

第七章　メラの瀧（七三七）

瀬戸の海、小豆ケ島を船出してより、大島、琉球島、臺灣、ヒリツピン群島をいつしか越えて、南洋一の龍宮島と聞えたる、アンボイナ島の一角に高姫の一行は漸く到着した。

總て此方面には濁水漲り飲料水は唯天水を受けて使用するのみである。然るに此島計りは龍宮島と稱するだけありて、島の到る處に清泉湧き出で、且つ島は二つに分れ雄島、雌島と稱へられて居る。雌島の方には釣岩の瀧、一名雄瀧、及びメラの瀧、一名雌瀧の二つの龍琴が懸つて居る。さうして雄瀧の方は岩と岩との間より囂々として流れ落ち、雌瀧の方は大木の根本より湧き出づる稍細き水を、人工をもつて筧を作り瀧として居るのである。此島は世界の所在草木繁茂し、數多の屹然たる岩島の中に樹木蒼然として特に目だつた寶島である。酷熱の夏の日

も此瀧の邊に往けば樹葉天を封じ、瀑は淙々として清く落下し、萬斛の涼味を湛へて居る。實に南洋第一の天國淨土とも稱すべき聖地である。

高姫、蜈蚣姫は第一に此島に目をつけ、玉能姫が置し置いたる三個の寶玉は、テツキリ此島に納まりあるならんと、既に〳〵寶玉を手に入れた如く喜び勇み、先を爭うて上陸し、雄瀧の方に向つて歩を進めた。餘りの嬉しさに船を磯端に繫ぐ事を忘れた。折柄の稍強き風に、船は一瀉千里の勢で沖の彼方に流れ去つて仕舞つた。されど一行は船の流れたる事を夢にも悟らず、意氣揚々として釣岩の瀧の麓に進み、汗染んだ着衣を脱ぎ捨て、我一に涼味を味はんと瀧壺に飛び込み、一生懸命に蘇生した氣持で神言を奏上し始めた。

三日三夜一同は水垢離をとり元氣も恢復し、四邊の新鮮なる木の實を食ひ勢頓に加はり、彌全島殘らず玉の捜索に係る事となつた。高姫は雌島を、蜈蚣姫は雄島と部署を定めて、些しにても怪しき石と見れば引き剝り、山の芋を掘るやうに、こぐちから掻き廻し、此島に毛氈の如く敷き詰めたる麗はしき青苔を殘らず引繰返して仕舞つた。苔の下よりは怪しき形した蛇蜈蚣、守宮、蜥蜴の類間斷なく現はれ來り、高姫其他一同の體を目蒐けて飛びつき喰ひつく嫌らしさ、されど玉の行方に魂を抜かれた一行は何の頓着もなく『惟神靈幸倍坐世』を口々に唱へながら、時間を構はず疲れては休息し、喉が渴けば水を掬ひ、腹が空けば隣所の果物をむしり喰ひながら、向上蟲が梅の大木を一葉も殘らず食ひ盡すやうな勢で、島山の頂きまで殘らず土を引繰返し、苔を剝り捜索し終つた。其間殆ど三ヶ月を要したのである。

高姫、蜈蚣姫は執念深くも今度は磯邊に下り、大石小石をこぐちより一つも殘さず引繰り返し調へて見た。されど船蟲や蟹計りで、玉らしきものは一つも見當らなかつた。流石の高姫、蜈蚣姫も根氣盡き、又もや雄瀧の麓に集まり來り、胴を据ゑて水垢離にかゝる事となつた。磯

邊を各自調べながら玉に心を取られて、乘り來りし船の影だに無き事に氣の付く者は一人もなかつた。

七日七夜ばかり瀧壺を中心に水垢離を取つて居たスマートボールは、一人海邊に出でよくよく見れば船の姿なきに打ち驚き、島の廻りを何回となく廻つて調べて見たが、一向見當らない驚いて瀧壺の前に現れ來り、

『高姫樣、蜈蚣姫樣、大變で御座います』

と顏色を變へて云つた。

蜈蚣姫『大變とは何だエ、玉の所在が分つたのか』

スマートボール『そんな氣樂な事ですかいな。船が蘿張逃げて仕舞ひました』

蜈蚣姫『何、船が逃げた……なぜ追つかけて引張つて來んのだい』

スマートボール『逃げたか沈んだか、皆目行方が分らないのですもの』

蜈蚣姫『そりや大變だ、高姫さん、何うしませう』

高姫『さても〳〵氣の利かぬ者計りだな。……これ貫州さん、お前は船の責任者だ。一体何うして置いたのだい』

貫州『何うも斯うもありませぬワ。日の出神樣が私に憑つて船をかやせと仰有つた。それ故高姫さんの本守護神の御命令によつて、何處なりと勝手に往けと放り出しました。あの船は龍宮の一つ島に着くのが目的だから、遊ばして置くのも勿体ないと思つて、獨り活動さして置きました。やがて目的を達するでせう』

高姫『お前は何と云ふ馬鹿なのだ、船計り行つた處で、我々の肉体が往かねば何にもならぬぢやないか。船が無ければ、何時迄もこの島に蟄居して居らねばならぬぢやないか』

貫州『それでも貴女は人間の肉の宮は神の容器と仰有つたでせう。日の出神樣も、大黑主命も、蜈蚣姫樣の本守護神も、今頃はあの船に乘つて、目的地に安着して居るでせう。此島に上つてから百日以上になりますから、何程遠くても最早一つ島に到着し、そろ〳〵歸つて來る時期ですから、さうやきもき云はずに待つて居なさるが宜しからう』

蜈蚣姫『何と間の抜けた男だなア。……高姫さん、流石は貴女の御家來ぢや。抜け目のない理窟計りはよく揑ねますね。一体何うして下さる』

高姫『此處は南洋の龍宮島、澆季末法の世の中には諸善龍宮に入り給ふと云ふからには、我々は善一筋の誠の神だから、この龍宮島を永遠の住家として、天壽を樂しまうぢやありませぬか』

蜈蚣姫『ようも……負惜しみの彈い事が云へますぢやい。……三つの寶玉は何うなさる積りだ』

高姫『それは飽迄も探さねばなりませぬ。まア見こりなさい、おつつけ神樣が我々の神德に感じ、船を持つて迎ひに來て下さるのは鏡にかけて見るやうなものだ。刹那心を樂しんで、取り越し苦勞をせないやうにして下さい』

スマート『何だか船が無いと來ては、何程結構な龍宮島でも氣樂に暮す氣にはなれぬぢやありませぬか。……ア、俄に綺麗な山も嫌な色になつて來た。美しい瀧の景色も地獄のやうな氣分がしだした。ア、此結構な島が船のやうに動いて、俺達を何處かの大陸へ送つては呉れまいかなア』

高姫『まア愚圖々々云はずに待つて居なさい。海賊船でもやつて來たら、それでも占領して乘

つて行けばよいぢやないか。何事もなるやうにしか成らぬ世の中だ』

と稍捨鉢氣分になり、青草の上に身を打つ付けるやうに、不行儀に高姫は寢轉んで仕舞つた。

スマートボール『エ、何處迄も徹底した自我の強い婆アだなア』

と小聲に呟きながら密林の中に姿を匿した。蜈蚣姫其他一同は、思ひ〳〵にこの島山を捨鉢氣分になつて駈廻り、適當な場所に身を横へて、因果腰を定める事となつた。雄瀧の麓に高姫は唯獨り横はつた儘遂に夢路に入つた。……

高姫は漸く目を醒し四邊を見れば、一人の人影も無きに驚き、

高姫『サア大變、誰も彼も腹を合せ此高姫を置去にして、流れて來た船にでも乘つて逃げたに相違あるまい。ア、賴み難きは人心。……貫州の奴、此高姫に一言も答へず、逃げ歸るとは不親切極まる。併し乍ら餘り口汚く叱りつけたものだから、根に持つて復讐をしようとしたのだらう。エ、仕方がない』

と四邊を見廻せば、蓑笠などが其處に殘つて居る。

高姫『ハア、矢張何處かへ行つたのだな。何處へ匿れても此島中には居るだらう。まア〳〵皆の者共が早く此處へ歸つて來るやう御祈念でも致しませう』

と獨言ちつゝ雌瀧の傍に進み寄つた。折柄の濃霧に包まれて、一尺の先も見えないやうになつて來た。高姫は雌瀧の傍に蹲踞みながら、兩手を合せ祈願を始めた。

高姫『第一番に力と賴む貫州の行方が分りますやう。蜈蚣姫其他の連中は神界の御都合に依つてお匿し遊ばすなら、たつてこは申しませぬ。兎も角も必要なは貫州一人、何卒彼だけなりと私の傍に引き寄せて下さいませ。何分小さい島と申しても、十里も周つた此浮島、容易に探し當てる事は出來ますまい。何卒御神力をもつて、一時も早くお引き寄せを願ひ

奉ります』

メラの瀧の上にチョコナンとして、瀧水を弄つて居つた貫州は、高姫の此祈り聲を聞いて造り聲をしながら、

貫州『此方は、誠の生粋の日本魂の日の出神であるぞよ。其方は日の出神と申せども、實は三千年の劫を經たる古狸の靈が宿つて居るのであるぞよ。よく胸に手を置いて思案を致せよ。汝の改心が出來たなら、いつ何時なりとも、其方の前に貫州一人現はして見せうぞ。何うぢや、もう今後は日の出神樣呼ばはりは致さぬか』

高姫『貫方は日の出神樣と今仰有つたが、そりや違ひませう。眞の日の出神は此高姫の肉体にお憑り遊ばし、大黒主命と半分同志の靈魂が一つになつて高姫と現はれ、世界中の事を調べぬいて、神政成就の土臺となる結構な身魂でありますぞ。いづれの神か知らねど、よく審神をして下さい。眞の事を知つた神は、世界に一神よりか無いとお筆に出て居ますぞ。枝の神の分際として何が分つて堪らうぞい。改心なされ足許から鳥が立ちますぞえ』

貫州は餘りの强情に愛想を盡かし、且つ可笑しさに吹き出さうとしたが、齒を喰ひしばり氣張つて居る。齒は『キー〳〵』、喉許で笑ふ聲『キウ〳〵』と體中に波を打たせ蹲踞んで氣張つて居る。高姫は瀧の下より、

高姫『エ、油斷のならぬ。何程諸善神の集る龍宮島でも、寸善尺魔とか云ふ惡神が高姫の氣を引きに來よつたな。併し乍ら高姫の辯舌、否言靈に、仕方なく四足の性來を現はし、……キー〳〵、キウ〳〵……と啼いてるやがる。野良鼠か、栗鼠か、鼬か、貂か、又も違つた豆狸か、一時も早く此場を立ち去れ。日の出神の生宮の前も憚らず、四足の分際として高い所に上ると云ふ事は、天地顚倒も甚だしい。シイ〳〵』

と頬りに齒の脱けた口から唾を飛ばしながら吐つて居る。貫州は益々可笑しさに耐へ兼ね、脇の邊りで『キウ〳〵』と笑ひ出した。此處へ濃霧の中を兩手を前に突き出し、盲が杖無くして歩くやうに、探り足にやつて來たのは蜈蚣姫であつた。貫州は皺嗄れ聲を出し、

貫州『如何に高姫、汝の願ひ叶へてやらう。其方は蜈蚣姫を此島に一人殘し置き、貫州を連れて逃げ出した方が都合がよいとの意志を表示したであらう。表面は蜈蚣姫とバッを合せて居るが、其方の心の中は決してバラモン教では無い事はよく分つて居る。唯三個の玉さへ手に入れば、蜈蚣姫は何うでもよいのだ。何うだ、神の申す事は間違ひあるまい』

高姫は聊か迷惑顔しながら、

高姫『モシ〳〵蜈蚣姫樣、何處へ往らつしやつた。私はどれだけ心配したか分りませぬワ。ようマア無事でゐて下さいました。此通り濃霧に包まれて一尺先は分らぬやうな事で御座いますから、種々の枉津が現はれて、今お聞きの通り貴女と私の仲を惡くし内輪喧嘩をさせ内部から結束を破らせようとするのだから、用心なさいませや』

瀧の上から貫州は、

貫州『蜈蚣姫とやら、高姫の口車に乘るなよ。眞の日の出神此處にあり』

蜈蚣姫『ハイ、有難う御座います。貴神のお言葉は寸分間違ひはありますまい。私はこれから氣をつけます。……モシ〳〵高姫さん、神樣は正直ですな。國城山の岩窟で貴女が俄に豹變的惡度を取つた時から、一癖ありと始終行動を監視して居りました私の案に違はず、今眞の日の出神樣が證明して下さいました。サア如何です。これ高姫さん、返答がありますか』

貫州は霧の中より、

貫州『蜈蚣姫も蜈蚣姫ぞ！。高姫を巧く利用して玉を探させ、其上にて巧くボッタクリ、高姫に蛸の揚げ壺を喰はす所存であらうがな。神は汝の申す如く正直一方、嘘はチットも申さぬぞよ』

高姫はしたり顔、

高姫『蜈蚣姫さん、それ御覽、貴女こそ腹が悪いぢやありませぬか』

蜈蚣姫『悪ミ悪ミの寄り合ひだもの、云ふだけ野暮ですよ。オホ、、、』

と笑ひに紛らす。

此時この島の特産物たる五寸許りの熊蜂が、『ブーン』とうなりをたてゝ高姫の頭に礫の如く衝突し、勢あまつて蜈蚣姫の鼻柱に撥ね返され、蜂は一生懸命に鼻にしがみつき鼻の孔を鋭利なる劍にてグサリと突き立てた。蜈蚣姫は『アイタ、、』と云つたきり、兩手に鼻を抑へて其場に倒れた。蜈蚣姫は高姫が鐵拳で鼻柱を目蒐けて喰はした事と思ひつめ、

蜈蚣姫『悪逆無道の高姫、不意打を喰はすとは卑怯千萬。やア、スマートボール其他の者共、早く來つて高姫を縛り付けよ』

と呶鳴つてゐる。見る〳〵顔は脹れ上り、鼻も目も口も腫れ塞がつて仕舞つた。高姫は驚いて、

高姫『モシ〳〵蜈蚣姫さん、私ぢやありませぬ。熊蜂が噛んだのです。何卒悪く取つて下さいますな』

瀧の上の霧の中より、

貫州『蜈蚣が蜂に刺されたぞよ。是を見て高姫改心を致されよ。雀ケ原に鷹が降りたやうな横柄振を今迄發揮して居たが、高姫の目を又熊蜂に刺さしてやらうか。此方は熊蜂の精靈で

あるぞよ。其方は餘り慢心が強い故に、兩人互に他人の頭の上に上らうと致して居るからこんな戒めに遇うたのぢや。それ程偉い者になつて人の頭に上りたくば、天井裏の鼠になつと成つたがよからう。人が除けて通るやうな御神德が欲しいと申して、南洋三界まで玉を探しに參り、それ程偉くなり度くば肥擔ぎになれ。誰も彼も皆除けて通るぞよ。も一つよい事を敎へてやらう。泥坊になれば人が恐れるぞよ。神德を得て人を恐がらし度くば何の手間暇は入らぬ。鐵道を嚙り砂利を喰ひ、鋼鐵艦を呑むやうな達者な齒になれ。さうすれば世界の奴は其方に對して齒節は立たぬぞよ。またも間違つたら癩病患者、疥癬患者になれ』

と『キウ〳〵』と喉の中で笑うて居る。突然凉風吹き起り、四邊を籠めた濃霧は俄に晴れて遠望千里の光景となつて來た。貫州は驚いて高姫に顏を見られじと袖に面部を被ひ乍ら走り行く

途端に踏み外し、高姫の足許にドスンと落ちて來た。高姫は『キヤツ』と云うて二歩三歩後へ飛び退き、よく〳〵見れば貫州であつた。

高姫『ヤア、お前は貫州か。何だか合點がゆかぬと思つてゐたら何と云ふ惡戯をするのだ。罰は覿面、これこの通り逆とんぼりを打つて苦しまねばならうまいがなア』

貫州『ヤアもう誠に不都合千萬で御座いました。何分守護神が現はれたものですから』

高姫『馬鹿を云ひなさるな。二つ目には守護神々々々と口癖のやうに……其手は喰ひませぬぞエ。それよりも今の中に船に乘つてサア〳〵玉探しにゆきませう』

貫州『蜈蚣姫樣が蜂に刺されて此通り苦しんで御座るのに、何うするつもりですか。神樣の道は敵でも助けるのが法ぢやありませぬか。さうして船に乘らうと云つた處で船が無いぢやありませぬか』

高姫『ア、さうだつたなア。ほんとに〳〵お氣の毒な事になつた。……蜈蚣姫さん、何卒早く全快して下され』

と蜈蚣姫の背中を撫で、次に胸を撫でゝ慰めてやらうとする。目も鼻も口も腫れて化物のやうになつた蜈蚣姫は、鷲のやうになつた爪を立てゝ、高姫の手が體に觸つたのを目當に力限り搔きむしつた。高姫は顏を顰めながら血潮の滴る手を押へ、草をもつて血止めの用意をくる〳〵捲きつけた。

スマートボール、久助、お民其他の從者共は濃霧の晴れたのを幸ひ此場に駈け來り、二人の態を見て驚き、口をポカンと開けた儘言をも云はず立つて居る。この時磯端に當つて、涼しき三五教の宣傳歌が聞えて來た。果して何人の聲であらうか。

（大正一一・七・二　舊閏五・八　加藤明子錄）

第八章　島に訣別（七三八）

玉治別『神の經綸も白浪の
三つの御玉を探らんと
執着心の何處までも
深き海原に浮びつゝ
此世の瀨戸の海越えて
家島　高島　小豆島
國城山の岩窟に
砦を構へて瑞寶の
所在を探す蜈蚣姫
心も同じ高姫が
やう〳〵妥協をとゝのへて
再び船に棹をさし
梅島　竹島　櫻島
馬關の海峽乘越えつ
神の惠も大島や
栗島　岩島　竹野島

尙も進んで琵琶の島
嶮に高き龍宮島
尋ね來るぞ果敢なけれ
言依別の神司
再度山の山麓に
玉能の姫の物語り
玉に心を奪はれて
南洋さして出で行きし
耐り兼ねたる玉治別の
玉能の姫を動かせて

南洋一の靈場こ
玉の所在を探るべく
吾は聖地に現れませる
稜威の御言をかゝぶりて
尋ねて來る折柄に
三五教の高姫は
荒き海路を渡りつゝ
話を聞くより矢も楯も
天地に通ずる眞心は
新に堅き船造り

御後を慕ひ來りけり
波に漂ひ船を破り
二三の人の影を見て
バラモン教の宣傳使
神の教の信徒こ
清さん　武さん　四人連
救うて漸く此島に
落ちたる笠は高姫の
心も勇み身も勇み
潜りて此處に來て見れば

馬關の瀬戸を過ぐるこき
岩に喰ひつき泣き叫ぶ
船を近寄せ眺むれば
友彦初め三五の
仕へ奉りし鶴さんや
九死一生の有樣を
來りて見れば海端に
此處に居ませる印ぞこ
青葉茂れる木の間をば
雄瀧雌瀧こ相並び

天下に無比の絶景と
忽ち包む深霧に
雄瀧の前に佇みて
雌瀧の方より聞え來る
何事ならんと氣を苛ち
咫尺辨ぜぬ霧の中
心をいらつ一刹那
神の伊吹に拂はれて
小路を傳ひ來て見れば
愈〻此處に立籠り

憧憬れ居たる折もあれ
咫尺を辨ぜず一行は
樣子窺ひ居たりしが
怪しき女の叫び聲
助けんものと思へども
手を下すべき由もなく
忽ち吹き來る科戸邊の
一望千里の晴れの空
高姫さんの一行が
禊の修業の最中と

覺りし時の嬉しさよ
御靈幸ひましまして
一日も早く晴らせかし
玉能の姫や初稚姫の
汝が命を救はんと
嗚呼高姫よ其外の
心平に安らかに
い、い、に詳細に聞召せ』
うまらに詳細に聞召せ』

嗚呼惟神々〻
高姫さんの胸の中
我は玉治別神使
誠の御言に從ひて
やう〳〵此處に來りたり
神の大道を歩む人
我一行の眞心を

と歌ひつゝ男女七人、高姫の前に立ち現はれ、歌に裝ひて來意を述べ立てた。
高姫は一行の姿を眺め、

高姫『ヤアお前は玉能姫と初稚姫さん、それに玉治別の田吾作ごの、何用あつて執念深く高姫の後を付け狙うてお出でたのだ。矢つ張り玉の所在を探されてはならないと思つて、夜も碌々寢られず、こんな所迄調べに來たのだらう。遙々と御遠方の處御苦勞樣。よもや高姫が此島に居ることは思はなんだでせう。サアかうなる以上は玉を隱したのは、此龍宮島に間違ひない。百日餘りも探して見たが、何分大きな島だから充分に調べる譯にも行かず、サアよい處へ來た。今度は玉の所在を明瞭言ひなされ』

玉能姫『高姫さん、何程お探し遊ばしても　三十萬年の未來でなければ、三つの神寶は現はれませぬ。妾は決して貴女方の玉探しを、氣に懸けて參つたのではありませぬ。初稚姫樣が教主言依別命樣の命を奉じ、高姫さんは玉に心を奪はれ、いらぬ苦勞をなさるのが氣の毒だから、お迎ひ申して來いとの御命令、船は流され嘸お困りだといふ事を、神樣が先にお分りだから、二つの船を持つてお迎ひに來たのです。どうぞ我々の此處へ來た事を善意に解して下さい』

高姫『これは〳〵何から何まで抜け目のない言依別命。……初稚姫、玉能姫さん、船を二艘も持つてようマア來られました。誠に御親切有難いと申したいが、さう安々とお禮を申されぬ理由が……ヘン御座いますワイ。あれだけ此高姫に揚壺を喰はし、喜んで居る言依別命に海洋萬里の此島迄、私を助けに來る親切があれば、玉隱しをしたりして我々を苦しめる道理がない。元をたゞせば此高姫がこんな處まで來て、あらゆる艱難苦勞するのも、みんな言依別命、初稚姫、杢助、玉能姫樣のお賢い惡智慧のお蔭ですワイ。ようマアこれ丈人に心配をかけて下さつた。何程高姫の機嫌をとらうと思つても其手には乘りませぬぞえ』

玉治別は口を尖らせ、

玉治別『何ごマア執念深き譯の分らぬ高姫だなア、命からゞ〳〵小舟に乘つて、萬里の波濤を渡り助けに來ながら、こんな小言を聞かうとは思はなかつたゝ……高姫さん、お前さん本當に沒分曉漢だなア』

高姫『コレ田吾作ごん、何をツベコベと横槍を入れるのだ。お前は宇都山村で、芋の赤子さへ大切に育てゝ居れば性に合ふのだ。言依別の珍らしもん喰ひに拔擢されて宣傳使になり、玉治別の名を戴いたと思うて、變性男子の系統の生宮に、何をツベコベほざくのだ、スツコンで居なさい。あんまり偉相に云ふと此島の熊蜂が遣つて來て……それ其處に居る蜈蚣姫のやうな目に遭はされますよ』

と言葉尻をピンとはねて體を搖り、蜂を拂ふ樣な態度にてバタ〳〵と羽ばたきして見せた。玉治別は初めて其處に蜈蚣姫の倒れて居るに氣附き、一生懸命に神言を奏上し、言靈を唱へ鎭魂を施した。不思議や蜈蚣姫の腫は刻々にひすぼり、忽ち元の姿に復り、玉治別に向ひ兩手を合せ、涙を瀧の如く流し感謝の意を表して居る。

高姫『コレハ〳〵蜈蚣姫さん、お仕合せな事、妾が今救けて上げようと思つて、色々神樣に願つて居つた所、半時ばかりの間に全快させてやらうと、日の出神が仰有つて恰度今半時許り經つた所だ。其處へ玉治別がやつて來て烏のおどしの樣な恰好して鎭魂をしてそれで癒つたと思ふと大きな間違ひ、恰度好い時刻に來やがつて自分が癒した樣に思うて、お前さんの感謝の言葉を手柄顏に偉相に、……蚯蚓切りの蛙飛ばしの癖に、鎭魂に、神力があつてたまりますか。こんな男に病氣が癒せる位なら、妾は既に神樣の宣傳使はやめて居りますよ』

蜈蚣姫『ドチラのお蔭だか知りませぬが、有難う御座います。然し高姫さん、貴女は最前濃霧に包まれた時、……貴州だけ助けて下され、蜈蚣姫は御都合でドウなとして下さい……と祈つて居ましたねエ。隨分水臭いお方ですワ』

高姫『……』

玉能姫『貴女が噂に聞きました蜈蚣姫様で御座いますか。これは珍らしい所でお目にかゝりました。妾は生田森の玉能姫で御座います。此小さい女の方は聖地に於て有名な初稚姫様で御座います』

蜈蚣姫『さうかい。……お前がアノ挺でも棒でも動かぬ玉能姫だな。さうして頑固者の李助の娘と云ふのは此奴かいなア。ホンニ一寸小賢しい悪氣の有りさうな、無ささうな顏をして居るワイ、オホ、、、。……ヤアお前は糞まぶれになつて逃げて來た友彦ぢやないか。大方妾の後を追ひ、娘に逢はうと思つて來たのだらう。エ、穢らはしい。友彦の糞彦、サアトットと歸らつしやれ』

友彦『私は決して小糸姫に未練があつて參つたのではありませぬ。淡路島の酋長東助様が、私の大罪を赦して下さいまして、其代り御一同をお助けする爲めに船を持つて行けと命ぜられ、清さん、武さん、鶴さんと一緒に後を追うて參つたのです。東助様に神様がお告げ遊ばしたには、お前さんは南洋のアンボイナ島で船をとられるに違ひないから、船を持つて迎ひに行つて來いと仰有られて、情深い東助様が、お前を助ける様に私をお遣はしになつたのだ。東助さんにお禮を申さねばなりませぬぞへ。高姫さん、蜈蚣姫さん、どうです。これでも不足を云ふ處がありますかい』

高姫『イランお世話だ。誰が助けて呉れと頼みました。自分が勝手に口實を設けて、玉の所在

を探さうと思ひやがつて來たのだらう。ヘン阿呆らしい。誰がお禮を云ふ馬鹿があるものかい。いゝ加減に人を馬鹿にして置きなさい。餘人はイザ知らず、此高姫に限つて、そんな巧妙な嘘は喰ひませぬわいなア。オホ、、、』

と一言々々肩から胴体を捻つて嘲弄する。友彦は癇筋を立て、

友彦『私は何程嘲笑されても不足を云はれてもかまはぬが、さういふ挨拶をされて東助樣に對して、ドウいふ返事をしてよいか分りませぬ。何とかそこは人情を辨へての御挨拶が有りさうなものですなア』

高姫『ヘン、巧い事を仰有いますワイ。人を家島に放つたらかして、東助の野郎、清、武、鶴の三人を引捉へ、氣樂さうに追分を歌つて歸んだぢやないか。それ丈け親切があるなら、ナゼ私を家嶋へ放つて歸んで仕舞つた。ナント巧い言を云うても、事實が事實だから仕方がありますまい。オー恐や〳〵、虫も殺さぬ樣な面をして居るチツペの初稚姫や玉能姫が此年寄に素破抜きを喰はして、玉隱しをやると云ふ世の中だから、油斷も隙もあつたものぢやないワイなア。何程親切にして見せて下さつても、心から親切でない以上は、有難いとも何んとも思ひませぬ。却て其仕打が憎らしい。イヒ、、、』

と上下の齒をけたりと合はせ唇を四角にして、前に突出して見せる。

友彦『高姫さん、あんまりぢやありませぬか。東助さんはア、見えても、親切な方ですよ』

高姫『親切ぢやと云つて船頭位をして居る奴が何になるか。日の出神の天眼通でチヤンと調べてある。船頭社會のやんちやで家も何も無い奴だらう。偉さうに國城山に清、鶴、武を來させやがつて、一廉酋長だとか金持だとか吐しやがつて、態とに八百長で友彦を引縛つて歸り、其後を追かけて來たのだらう。船頭が賃錢なしに誰がお前達をよこすものか。又お

前達も日頃の泥坊根性を發揮して、高姫が玉を發見したら、フンだくつて歸らうと思うて來たのに違ひない。三百兩フンだくつたり、人の女房を狙ひそこねて、雪隱を潜つて逃げ出したりする樣な男が、何んな巧い言を云うても駄目だ。モツト人格のある男が云ふのなら、一つや半分は承知をせまいものでもないが、お前の樣な泥坊根性の男や、清、鶴、武の樣な裏返り者の云ふ事が、ドウして、……ヘン信じられますか。初稚姫、玉能姫、田吾作だとて其通りだ。七人が腹を合せ、高姫や蜈蚣姫の手柄を横取りしようと思つてやつて來た其計略、假令千万言を盡し辯解しても……ヘン、だアめですよ』

と兩手を前の方にニユウと突き出し、腰を曲め、尻を縱に振つて、蛙の如く二三間前にピョン〳〵飛んでキョクツて見せる。

蜈蚣姫『高姫樣が何と仰有らうとも、ごうぞお氣に障へて下さいますな。あの方は一寸變つて居ますから、妾は船を持つて來て下さつたのが何より有難い。玉能姫樣、初稚姫樣有難う此通りお禮を申します』

と涙を流しながら兩手を合して心の底より感謝してゐる。

玉能姫『何これしきの事に、お禮を仰有つて下さつては、却て耻かしい樣な氣が致します。世の中は相身互ひで御座います。天が下に他人だの敵だのと云ふ者が有らう道理が御座いませぬ。サア何時迄も斯樣な所に居られましても、玉は決して出ては參りませぬ。早く歸りませう』

蜈蚣姫『ハイ有難う。そんなら船を持つて來て下すつたのを幸ひ、妾は娘の小糸姫に逢ひたくてなりませぬから、龍宮の一つ嶋に渡りますから、ごうぞ一艘の船をお貸し下さいませ』

玉能姫『二艘持つて參りましたから、一艘丈はごうぞ、御自由にお使ひ下さい。……サア高姫

樣、妾ど一緒に聖地に歸りませう。お供致しますから』

高姫『何んど云つても此處は一寸も動きませぬぞ』

玉治別『そんならお前さんの御勝手になさいませ。……サア皆さん、歸りたい方は船に乘つて歸りませぬか。居りたい方は手を上げて下さい。一、二、三……ヤア何方も歸りたいど見えます。一人も居りたい人はないど見えます。一寸も動かないど仰有つた高姫さんでさへも手を上げなさらぬワイ』

高姫『誰が田吾作の命令に服從して、この尊い手を安々ど上げたり下げたりしますかいナア。ササ早う往つて丈夫な船に乘りませうかい』

ミムク〳〵ど起上り、濱邊を指して一目散に走つて行く。一同は高姫のあどに附き添ひ濱邊に出た。高姫は早くも一艘の船に飛び乘り大勢を殘し、只一人海の中に遠く漕いで走り行く。

玉治別『ヤア高姫の奴、怪しからぬ事をしやがる。大きい好い船に只一人乘りやがつて此小船に是丈けの者が乘るのは大變に險難だ。波の靜かな時は好いが、チットでも波が立つたら遣り切れない。困つた事になつたものだ』

ど磯端に地團駄踏んで口惜しがつて居る。一方高姫はメラの瀧の麓に肝腎要の印籠を忘れた事を思ひ出し、イヤ〳〵乍ら再び船を漕いで此方へ歸つて來る。

玉治別『ヤア、さすがの高姫も沖まで出て恐くなつたど見え、後戻りして來をる。偉さうに云つても流石は女だ。これでは日の出神の生宮も好い加減なものだなア。アハ、、、』

『オホ、、、』

大勢一度にドット笑ふ。此時長途の航海に馴れた手で、艪を操り矢を射る如く戻つて來た高姫は、

高姫『皆さん、一寸漕いで見たが隨分面白いものだ。是なら假令百里千里漕いだところで大丈夫だよ。妾はメラの瀧に落し物をしたから、五六丁の所だから往つて來るよつて待つて居て下さいよ。……コレ〳〵貫州、玉治別さん、妾に附いてお出で、若し船を出されちや大變だから……』

貫州、玉治別は口を揃へて、

玉、貫『滅相な、我々兩人は揃ひも揃うて足の裏を竹の切り株に突き、一歩も歩けないのだ。我々一同は此海の景色を眺めて待つて居るから、貴女一人行つて來て下さい、決してお前さんのやうに意地の悪い事はせぬからなア』

高姫は慌しくメラの瀧の方に向つて、青葉を縫うて姿を隱した。其間に玉能姫、初稚姫、玉治別、清、鶴、武の六人は新しき船に乘り込んだ。蜈蚣姫、友彦、久助、スマートボール、お民其の他二人は、稍古き小船に身を寄せた。さうして手早く纜を解き、十間ばかり陸をはなれて面白可笑しさうに笑ひさざめいて居る。そこに高姫は印籠を引攫み、スタ〳〵こ走り來り、

高姫『妾に應答もなしに……何故船を出した。サア、早く船を漕いでこちらへ寄せなされよー』

玉治別は新船を、友彦は古船を一生懸命に漕ぎ出した。一刻々々陸地を遠ざかる。高姫は聲を限りに、

高姫『オーイ、此方へ寄せるのだー』

友彦『何んだか知らぬが、漕げば漕ぐほど船が先へ行くのだよ』

と歌を謠ひながら、意地悪く沖に向つて漕ぎ始めた。高姫は赤裸になり、印籠を口に銜へ、着

物を頭にくゝりつけ、拔手を切つて蜈蚣姫の乘つた古船に向つて泳ぎ行く。友彦は相變らず急いで艫を漕ぐ。

蜈蚣姫『コレ〳〵友彦、そんな意地の惡い事をするものでない。高姫さんの心にもなつて見たがよからう』

友彦『餘り口が好いから改心の爲めに、一寸いちやつかしてやつたのです。そんなら待ちませうか』

と艫の手を休める。高姫は命カラ〴〵漸くにして船に喰ひついた。スマートボール、貫州は高姫の兩手を持つて、やつとこの事で船の中に引上げた。

玉治別は艫を操つりながら此場を見捨てゝ何處ともなく歸り行く。……高姫、蜈蚣姫一行を乘せた船は友彦に操られ、西南の縹渺たる大海原を指して進み行く。

（大正一一・七・二　舊閏五・八　谷村眞友錄）

瑞月

人の世の憂きはならひとあきらめて
　まことの神を知らぬ曲津靈
人の住む世は如何ばかり憂しとても
　開けば開く道ありにけり

人の身はならはしにより善となり
　惡にも變るあやしき存在
肝向ふ心にかなふ業ならば
　如何なる大事もとげざるはなし
現身の人の生命は夢の如し
　われいたづらに過ごすべきかは

第三篇　危機一髪

第九章　神助の船（七三九）

神が表に現れて　善と惡とを立別ける
朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも　高姫生命を棄つるとも
島の八十島八十の國　山の尾の上や川の末
海の底まで村肝の　心到らぬ隈もなく
探さにや措かぬと雄猛びし　矢竹心の矢も楯も
堪りかねたる玉詮議　左右の目玉を白黑と
忙しさうに轉廻し　善と惡との瀬戸の海

牛に曳かれて馬の關
數多の島々右左
波を辷つてアンボイナ
珍の龍宮と聞えたる
玉の所在を探す内
玉照彦の神言もて
玉治別の三人は
生田の森にて足搦ひ
危難を救ひ助けんと
漕ぎ來る折しも霧の中
狹き喉首乘り越えて
眺めて越ゆる太平の
南洋諸島の其中で
芽出度き島に漕ぎつけて
綾の高天の聖地より
初稚姫や玉能姫
再度山の山麓の
船を準備へ高姫が
潮の八百路を打渡り
仄かに聞ゆる叫び聲

唯事ならじと船を寄せ
バラモン教の宣傳使
武の四人が船を破り
力限りにかぢりつき
玉治別は快く
率る來りし伴舟に
男波女波を打渡り
雄島雌島の合せ島
船を漕ぎつけをちこちと
濃霧に包まれ千丈の
よく〳〵見れば此は如何に
友彦初め清鶴や
生命の綱と岩壁に
救けを叫ぶ聲なりし
四人の男を救ひ上げ
友彦其他を救ひつゝ
雄瀧雌瀧の懸りたる
アンボイナ島の龍宮へ
青葉茂れる山路を
瀑布の音を知るべしし

近より見れば瀧津瀬の
一行七人瀧の前に
驚異の眼をみはりつゝ
涼味に浴する折柄に
常事ならじと近寄りて
腕は血潮に染りつゝ
面をふくらせ何事か
妖怪變化に擬ふなる
瀧の麓に倒れ居る
手負に向つて鎭魂の
張り落つる音ばかり
佇み此れの絶景を
其壯烈を歎賞し
濃霧を透して婆の聲
窺ひ見れば高姫の
團栗眼を怒らして
囁く側に蜈蚣姫
化物面を曝しつゝ
玉治別は驚いて
神法修し一二三四
五六七八九十
靈歌を頭上に放射せば
元の姿に全快し
心の底より感謝しつ
玉治別の一行は
所在を知つた嬉しさに
言依別の命令を
心ねぢけし高姫は
相も變らず減らず口
憎々しげに罵れば
百千萬と言靈の
幾許ならず蜈蚣姫
地獄で佛に遭ひし如
嬉し涙に暮れにけり
探ね來りし高姫の
眞心こめていろ〳〵と
完全に委曲に宣りつれど
情を仇に宣り直し
叩いてそこらに八當り
流石無邪氣の一行も

呆れて言葉なかりけり　ヤッサモッサの押問答
やう〳〵治まり一同は　二隻の船に分乘し
玉治別の操れる　船には初稚　玉能姫
鶴武清の六人連　波を乘り切り龍宮を
後に眺めて離れ行く　殘りの船は友彦が
艫を操りつ蜈蚣姫　高姫　貫州　久助や
スマートボールやお民等の　一行を乘せてやう〳〵こ
波ののたうつ和田の原　西南指して進み行く
前後左右に駈けまはる　海蛇の姿眺めつゝ
轟く胸を押隱し　心にも無き空元氣

船歌うたひ友彦が　力限りに炎天の
大海原に搾る汗　ニュージランドの手前迄
進む折しも暴風に　吹きまくられて浪高く
危險刻々迫り來る　左手に立てる岩山の
影を目標に漕ぎ寄せて　難を避けんと進み寄る
鬼か獸か魔か人か　得体の知れぬ影二つ
猿の如く岩山を　駈けめぐり居る訝かしさ
此世を造りし神直日　心も廣き大直日
唯何事も人の世は　直日に見直し聞直し
身の過ちは宣り直す　神の救ひの船に乘り

大海原に漂へる
生命の親と伏拜み
ア、惟神々々
祈る言靈勇ましく
此神言を聞きしより
此方に向つて下り來る

友彦は怪しき二つの影を見て、

友彦『ヤア高姫さん、蜈蚣姫さん、愈〻願望成就の時節到來、お喜びなさいませ。貴女のお探ねになる代物は漸く此島に在ると云ふ事が、的確に分つて來ました』

高姫吃驚した樣な聲で、

此岩島を一同が
こゝに小船を止めつゝ
御靈幸はひましませと
雷の如くに鳴り渡る
二つの影は嬉しげに
神の仕組ぞ不思議なる。

高姫『エ、何と仰有る。あの玉が此島に隱してあると云ふのか』

友彦『御覽の通り、眞黑々助の、ア…タマが二つ、如意寶珠の樣にギラ〳〵した目のタマが四つ、貴女方を歡迎し、上下左右に駈けめぐつて居るぢやありませぬか。ありや屹度玉の妄念ですよ。黃金の隱してある所には何時も化物が出ると云ふ事だ。彼奴はキツト如意寶珠の精が現はれ、人に瀆されない樣に保護をして居た所、焦れ〳〵た……言はば……玉の親のお前さんがやつて來たものだから、再び腹の中へ呑み込んで歸つて貰はうと思ひ、妄念が現はれて玉の所在を知らして居るのに違ない。斯んな所に……さうでなければ黑ン坊が住居して居る筈はない。キツトさうですよ。女の一心岩でも突き貫くとやら、あの通り岩を突き貫いて玉の精が現はれたのだ』

高姫は目をクル〳〵させ乍ら、二つの影を凝視め、

高姫『如何にも不思議な影だ。ごう考へても斯んな離れ島に船も無し、人の寄りつく道理がない……サア蜈蚣姫さん、あなたはモウ玉に執着心は無いと仰有つたのだから微塵も未練はありますまいな』

蜈蚣姫『妾はあんな黒ン坊にチットも執着心は有りませぬ』

高姫『さうでせう。それ聞いたら大丈夫、サア是れから貫州と二人此岩山を駈け登り玉の所在を探して來う……イヤ〳〵待て〳〵、腹の悪い連中、岩山の上へあがつて居る後の間に、蜈蚣姫さんに船でも盗られたら、それこそ大變だ。……サア貫州、お前は此船の纜をキユツと握つて放す事はならぬぞえ。……モシ蜈蚣姫さん、お附合に從いて來て下さいな』

蜈蚣姫『オホ、、、、さう御心配なさらいでも、減多に船を持つて逃げる樣な事はしませぬ……こは請合はれませぬワイ』

高姫『サアそれだから險難だと云ふのだ。わしの天眼通は、お前さんの腹のドン底までチヤーンと見抜いてある。それが分らぬ樣な事で、ごうして日の出神の生宮が勤まるものか……ア、仕方がない。貫州、お前御苦勞だが、玉の所在を、あの黒ン坊に從いて探して來て呉れ。わしは蜈蚣姫さんの監督をして居るから……アトア油斷も隙も有つたものぢやないワイ』

蜈蚣姫『オツホ、、、、よう惡氣の廻るお方ですな。お前さんは寶を見ると直にそれだから面白い。恰度、犬コロが三つ四つ一所に集まり、顔を舐めたり、尾を嘗めたりして互に睦まじう平和に遊んで居る、其處へ腐つた肉の一片を投げて與ると、忽ち爭鬪を始め、親の讐敵に出會うた樣に喧嘩をするのと同じ事、お前さんは寶が……まだ本當に有るか無いか知れもせぬ前から、目の色まで變へて騒ぐのだから、本當に見上げた御精神だ。いつかな惡黨

な蜈蚣姫も腹の底から感服致しました。……スマートボール、お前は貫州さんと一緒に黒ン坊の側へ行つて、萬々一玉が有ると云ふ事が分つたら、外の二つの玉は如何でも良いから、金剛不壊の如意寶珠を、非が邪でもひつたくつて來るのだよ。此蜈蚣姫ぢやとて、性來から善人でもないのだから賣の山へ入り乍ら手振りで歸る樣な馬鹿ぢやない。今迄の苦勞を水の泡にはしともないから、わしも大コロになつて、力一杯爭うて見ませうかい。

オッホ、、、』

高姫『一旦お前さんは小糸姫にさへ會へばよい、玉なんかに執着心は無いと、立派に仰有つたぢやないか。それに何ぞや、今となつて子と玉の變換をなさるのか』

蜈蚣姫『變說改論の持囃される世の中だから當然さ。……コレ、スマートボール、高姫さんが何程鯱になつても、味方と云へば貫州さん唯一人、あとは殘らず私の幕下計りだ。寡を以て衆に敵する事は到底不可能だ。何程多數黨が横暴だと國民が叫んでも、何程少數黨が正義だと云つても、矢張多數黨が勝利を得る世の中だもの、泰然自若、チットも騒ぐに及びませぬ。他人の苦勞で德とると云ふ事は恰度此事だ。高姫さん、御苦勞乍ら貫女、玉の所在を査べて來て下さいな。同じ大自在天に献上するのだもの、誰が取つても同じ事、それに貫女は私に玉を取らそまいとする其心の底が分らぬ。大自在天樣を看板に、ヤッバリ三五教の大神に献上する考へだらう。何程布留那の辯の高姫さんでも、心の中の曲者を隱す事は出來ますまい……あのマア迷惑相なお顏付、オッホ、、、』

と口ワザと肩を搖り、高姫流の嘲笑振りをして見せる。斯かる所へ二人の黑ン坊、斷崖絶壁に手をかけ足をかけ、大勢の前に下り來り、

チャンキー『わしはチャンキー、も一人はモンキーと云ふシロの島の住人だが、三年前に鬼熊別の

御娘小糸姫様を御送り申して、龍宮の一つ島へ渡る途中暴風に出會ひ、船を打割り、辛うじて此島に駈けあがり、生命を助かり、蟹やら貝なごを漁つてみじめな生活を續けて來た者ですがどうぞお前さん、我々二人を船に乗せて連れて歸つて下さいませ』

と手を合して頼み入る。毛は生え放題、髭は延び次第、手も足も垢だらけ、目のみ光らせて居る。二人の姿を間近く眺めた一同は、此言葉を半信半疑の念にかられ乍ら聞いて居る。蜈蚣姫は胸を躍らせ、

蜈蚣姫『ナニ、お前は小糸姫を送つて來て難船したと云ふのか。さうして小糸姫は何處に居りますか』

チャンキー『サア何處に居られますかな。私たちは男の事でもあり、漸く此島にかぢりついたのだが、あんまりの驚きで如何なつた事やらトツクリとは覺えて居りませぬ。大方龍宮へでも旅立たれたのでせう』

蜈蚣姫『龍宮と云ふのはオースドラリヤの一つ島の事かい』

モンキー『サア其一つ島へ行く途中に船が難破したのだから、龍宮違に、乙米姫様の鎮まり玉ふ海底の龍宮へお出でになつたのでせう。本當に綺麗な女王さんの様な方で、今思ひ出しても自然に目が細くなり、涎が流れますワイ。ア、惜しい事をしたものだ』

と撫然として語る。蜈蚣姫は今迄張詰めた心もガツタリと、其場に倒れ身震ひし乍ら船底にかぶりつき、忍び泣きに泣いて居る。高姫は蜈蚣姫の此悲歎に頓着なく、チャンキー、モンキー二人の胸倉をグツと取り、

高姫『これ、チヤン、モンとやら、お前は誰に頼まれて玉を隠したのだ。玉能姫か、言依別か但は此處に居る連中の誰かに頼まれて隠したのだらう。よう考へたものだ。斯んな遠い岩

山に埋没して置けば如何にも知れぬ筈ぢや。私ら今迄立派な〳〵アンボイナ島や、大島や小豆島を探さうとしたのが感違ひ、ア、時節は待たねばならぬものだ。サアもう斯うなつた以上は、お前が何と云つて辯解しても白狀させねば置かぬ。何程隱しても、斯んな小つぽけな島、小口から岩を叩き割つても、發見するのは容易の業だ。隱しても知れる、隱さいでも知れるのだから、エライ目に遇はされぬ内にトットと白狀したがお前の得だ』

チャンキー、モンキーの二人は寢耳に水の此詰問に、何が何やら合點ゆかず頭を搔き乍ら、

チャンキー『今貴女は玉を隱したとか、どうとか仰有いますが、一体何の玉で御座いますか』

高姫『オホ、、、、よう白ばくれたものだなア。それ、お前が玉能姫に賴まれた如意寶珠の玉だ。それを何處に隱したか、キツパリと白狀しなさい』

チャンキー『そんな事は一切存じませぬ』

モンキー『玉なんて名も聞いたこたアありませぬワイ』

高姫『ヨシ〳〵強太い者だ。腹を斷ち割つても、今度こそは白狀させねば置かぬ。ア、面倒臭い事だ。妾が自ら査べに行けば後が案じられる。蜈蚣姫さんは……ヘン……吃驚したよな顏をして船底にかぢりつき油斷をさせて、此高姫が山へ往つたならば矢庭に船を出し、此島に放つとく積りだらうし、ア、體が二つ三つ欲しくなつて來たワイ』

蜈蚣姫は漸くにして顏を上げ、

蜈蚣姫『わしも今迄戀しい一人の娘に會ふのを樂みに、心の合はぬ高姫と表面丈は調子を合して來たが、天にも地にも唯一人の娘が此世に居らぬと聞けば、モウ破れかぶれだ。……サア友彦、お前も憎い奴なれど、假令一年でも私の娘の夫となつた以上は、切つても切れぬ親子の仲、キツト私に加勢をして呉れるだらうな』

友彦『ハイお母さん、よう仰有つて下さいました。貴女の命令なら、高姫の生首を引抜けと仰有つても、引抜いてお目にかけます』

蜈蚣姫『ヤア頼もしや〳〵、親なればこそ、子なればこそ。何處にごんな味方が拵へてあるか分つたものぢやない。「ほの〴〵と出て行けど、心淋しく思ふなよ。力になる人用意がしてあるぞよ」……と三五教の神様が仰有つたと云ふ事だ。……（聲に力入れ）サア高姫、モウ斯うなる以上は化の皮を引ん剝いて婆と婆との力比べだ、尋常に勝負をなされ』

高姫『ヘン、蜈蚣姫さんの、あの噪やぎ様……イヤ狂ひやう。誰だつて一人の娘が死んだと聞けば、自暴自棄も起るであらう。氣が狂ふまいものでもない。併し乍ら其處をビクとも致さぬのが神心だ……女丈夫の大精神だ。小糸姫様が海へ沈んで龍宮行をしたと聞いて腰を抜かし、其愁歎振は何ですか。見つともない。此高姫は元來氣丈の性質、流石は生宮丈あつて、小糸姫が海の底へ旅立をしたと聞いて、落膽ごころか却て愉快な氣分に充された。なんと身魂の研けた者と、研けぬ者との心の持様は違うたものだ。オホ、、、』

蜈蚣姫『人情知らずの惡垂婆の高姫。……サア友彦、親の言ひ附けだ。櫂を持つて來て頭から擲りつけて下さい。一人よりない大事な娘が死んだのを、却つて愉快だと言ひやがつた。……サア早くスマートボール、久助、高姫を打ちのめし、海の龍宮へやつて下され。チャンキー、モンキーさん、お前さんも無理難題をかけられて、嘸腹が立たうのう。一寸の虫にも五分の魂だ。チットは敵討ちをしなさらぬかいな。敵は貫州と唯二人、モウ斯うなれば蜈蚣姫のしたい儘だ。……サア高姫、返答はどうだ』

と追々言葉尻が荒くなる。貫州は兩手を擴げ、